

目 次

三教の特色と其調和(下).....	本多日生
法國冥合の意義.....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(九).....	河合陟明
年頭の感話.....	久保田正文
日什大正師行狀記.....	榎本正
記 事	

○本部團報 ○福島支部報 ○産報會記 ○入帳報告

第 四 十 七 年 三 月 號

統

一

財團法

統

一團

發行

財團統一團體旨
法人統一團體旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天時會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進シテ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

御報

本團總裁 本多上人の第十二周年忌を迎ふるに當り、時局柄一入感無量を覺ふ。私共左記の通り報恩會相營み、本部に御參詣の方々へ聊か心ばかりの御供養させて戴き度く存じます。

猶乍勝手これを以て御通知に代へますから御諒承願上ます。

左記

- 三月十五日(日曜)
- 午後一時 本都御寶前法要嚴修
- 二時前 品川妙國寺詣出發
- 三時半 本堂焚香後御墓參
- 四時半頃 散會

以上

財團統一團

三教の特色と其調和 (下)

本多日生

三、儒教の特色

次に儒教の特色を申し上げます。儒教といへば廣いけれども、先づ孔孟聖賢の學に限つて考へれば宜しい。主なる教は大學・中庸・論語・孟子といふやうな書物になつて居るので、極く簡潔明瞭に書かれて居る、之には第一に數ふべきものは、

(イ) 宇宙感情 である。儒教は最も能く宇宙感情を説いて居る、宇宙感情といふのは吾々が天地に對する所の所謂天道を敬ふの心でありまして、中庸を見て開卷劈頭いさなり「天命之謂性」とあつて、天といふことを第一に言つて居る、儒教ぐらゐる天地宇宙に對する所の人間の感情を能く教へたものはない。大學に於ても之を「止於敬」といふ。人間は何れも此天地人に對して敬虔の感情を持つべきものである、「天之載無聲無臭至矣」天道の聲は聞くことは出來ぬけれども、併し至る所天道在ざるなし「洋洋乎如在」其上「如在」其左右」何時でも天道は自分の頭の上に天降つて居るが如

くに存して居ると云つて、宇宙感情によつて其身を正しうすることを言つて居る、ヘツボコ儒者が儒教の祭は孔子の祭だといつて居るのはヘツボコな佛者が厄除を言つて居ると同じである。儒教の尊信するのは孔子ぢやない、孔子は儒教の傳道者である、儒教は天を敬ふことを教へて居る、其の宇宙感情が大變に能く行つて居ります。宗教でなしに之を道德の上に一般人間の感情の上よりして開きたるもので、天を敬はずんばあるべからず、天に對して尊敬の心無き者は禽獸に等しいといふことをピタツと頭から言つて居る。日本人が聖賢の書を受繼いで居つたならば其心持がちやんとある、特別に信心する宗教がどうだと云つて今頃それが分らぬでマゴ／＼して居るのは、日本の文明史を知らない馬鹿である。古來のえらい人は皆言つて居る、だからして明治維新の始めでも天子様が五箇條の御誓文を御定めになつた時に、天地神明に誓はせたまふとか、或は天地の公道に原くべしとか、宗教でなくとも其時分皆天地といふことを言つて居る、楠木正成が正行に與へた巻物でも一番大事な所には「天道歴然」とある、これが正成の一番大事な教である、歴然といふのはもう山高く谷低くハッキリして居る、天道が見えないといふのは山が眼に這入らぬ、谷が見らぬ、夜が明けたのか日が暮れたのか分らぬといふことになる。夜と晝とは歴然として居る、天道は歴然、此事が即ち聖賢の教である。之を坊さんがそんなことを言ふといつて、今頃引付けて手を合すやうなことをするといふ所に學校の先生がお考になつたといふことは、如何に長い間無學であつたといふことを表明するもので、實に恥かし

いことである。それから儒教は、

(□) 實踐倫理 を教へる。天道を敬ふのでも決して迂遠な方に行かない、白雲の外に向けて行かない、人の爲に道を爲して遠きは道に非すと申して、人間の爲に道を説くのであるから、雲の上に向けて行つたり溝の中に落ちてしまつたりすることはしない、人の爲に立てたる道である、餘りに人に遠さかつた迂遠な道は人の爲の道でない、道遠きに非すと云つて教を立てた。それで君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・家庭・社會といふ實際生活の上に於ての心得方を教へた點に於て實に尊いものである、西洋の倫理學のやうな煩はしい議論のものでもなく、偏つたものでもなく、真に能く整頓して實際の徳を教へて居る、それは實に立派なものである。

(ハ) 倫理の調節 さうして其立派なものが能く調節されて居る。實踐倫理の調節、これは極めて大事なこと、儒教の倫理は、唯一方向に快樂主義だとか、個人主義だとか、西洋から来るやうなことは言はない。西洋は直きに一つで行く、戀愛主義だとか、利己主義だとか、享樂主義だとか、社會主義だとかいふから幾つも出て来る。儒教は各方面を整頓して考へて、『明德を天下に明にせんと欲する者は先づ其國家を治める、國家を治めんと欲する者は先づ其家を齊ふ、家を齊へんと欲する者は先づ其身を脩める、其身を治めんと欲する者は先づ其心を正しうす、其心を正しうせんと欲する者は先づ其意を誠にする』そこで『意識にして後に心正しく、心正しうして身脩まり、身脩まつて家齊

ひ、家齊うて國治まり、而して後に天下平か」ちやんと誠意正心から治國平天下に至る、個人一人の心を正しうする所から天下國家を治める所まで貫いて教を立てゝある。これが西洋の思想と全然違ふ所である、西洋は直きに個人主義・家庭主義・戀愛主義といつて一つを言ふ。夫婦を云へば親子が喧嘩しなければならぬやうなことになる、能くヒステリーの奥さんがあなたお母アさんを大事にしますか、私を大事にしますかといふ、お母アさんを大事にしますと云つて御覽なさい喰付きますといふ、これが西洋人である。昔の日本人はそんな馬鹿なことを考へない、母親にやさしい人は嫁にも必ずやさしい、母親に邪慳にするやうな者なら必ず女房にも邪慳にする、母親にはやさしくするが女房は邪慳にする、そんなことはないから、若し母親に邪慳にすれば、私にも邪慳にするに違ひない、お母アさんをあの位邪慳にすれば、後日私の頭も割られるだらうと考へるが、西洋ではお母アさんの頭を割つて呉れゝばそれだけこつちへ愛が来るのだといふことを考へる、さういふ三角頭の文明である。西洋人はさう言つたら腹を立てるけれども、あらゆる問題がさういふ風に變形思想を以て來て居る。是から後もそれを改めぬ限りは西洋の文明は中正にはならない、だからあれは反對に反對が起つて綱渡りして行くのである。それで今は資本制度に反對するやうなことを言うて居る、資本とか勞働といふものは協力しなければならぬものを、資本家のドテツ腹を蹴破つて資本家を打潰してしまはうといふ、資本家を潰してしまつたら自分がする仕事は何にも無くなつてしまふ。さういふ馬鹿なことを言うて

居る、實につまらぬ事である、夫婦喧嘩をして後で泣いて居ると同様な愚なことをやる。儒教はさういふ愚なものぢやない、『君臣の道は端を夫婦に造す、其の至れるに及んでや、天地に察かなり』と説いて居る、或は『峻として天を極む』と説いてある。夫婦の間の道德・夫婦の間の愛情から選つていへば天地を貫く道德まで一つである、夫婦の關係は天地に對し神佛に對する考とちつとも型は違ふものでない、端を夫婦に發して峻として天を極むと云つてある、これが西洋の人々には分らぬ所である、それは實に儒教のえらい所である、必ず東洋思想として西洋のお方々がお學びなさるべきは此點である。物の少しも偏つて居らぬ、信心するから家業を棄てゝ宜いといふことはない、家業が大事だからと云つて信心を棄てゝはならぬ、偏つた人間はしつかり儲けて貯めて置いて五十萬圓の金が出来たらそれから統一閣へ行かうといふ。それが出来ないうちに死んでしまふ、死ぬる時分になつて、アアしまつた、此位なら三十萬の時分から行けば宜かつたといふやうなことが起つて來る。信心は信心商賣は商賣、親子の道は親子の道、夫婦の道は夫婦の道、共に行うて矛盾する所はない、『道竝び行はれて相悖らず』といふ所が東洋道德の尊い所である。總ての川が流れて海に入るが如くに、互に妨ぐる所はない、利根川も信濃川も石狩川も、皆それ／＼川として流れて居るが、それが即ち『小徳は川流し大徳は教化す』といふので、大きな所に行けば一つになる、小さい所では皆一つ／＼の川がそれ／＼流れて居る、夫婦の關係が信濃川であるならば、親子の關係は石狩川である。其徳竝び行はれ

て相悖らず、往いては一つの大海に還る所が『一誠之を貫く』といふことになる、これが天地の大道である。之を儒教は實に能く教へて居る。さういふことをもつと學校教育に於ても、社會教育に於ても説かなければならぬ、何も彼も型を政府でやつて來ても、此の大眼目を充分教へないから思想の纏りも調和もつかなくなつて、資本主義が宜いとか、社會主義が宜いとか色々議論が出て來る、そんなことを言つて居つたら何處まで行つても一致のつくべきものでない。佛教では之を別居の思想と申し、三角頭、四角頭、八角頭がそれ、衝突するやうなものだと申して居る。どうしても一つの調和の觀念がなければいかぬ、先づ以て人間の心は圓いもので圓融自在のものだといふことを知らなければならぬ、人間の心は非常な微妙な働きを持つものである、有難いと考へること、お經を讀むこと、ちやんと一致して行つて我知らず手を合す、所が初めの間は有難いと思ふとお經の方は止まつてしまふ、有難いと思ふとお經は何處か分らない、お經の方に氣を付けて居ると有難い方は忘れて居る、お經は何處か、從三昧々々々、其方ばかりに心が行つて居るから有難いといふことが解らない、だから從三昧も有難いも一緒に考へなければならぬ。人間の心は圓いもので圓融自在、心は微妙なものだといふことが解れば解決は着く。そこが儒教は倫理の調節に於て最も能く教へて居る。尙ほ此の儒教には

(二) 倫理の概念 といふものが能く纏つて居る、總て物には纏りがなければならぬ、今の思想のやうに長い説明を要する、長い説明をしても分らぬといふのぢやない。今の西洋思想は個人主義と云

つた所が説明を附けられなければ分らぬ、是はさうして、あゝして、斯うして、さうなつて、斯うだといふ、實に説明が長い、解つたやうで解らぬやうで結局解らぬ、それでは役に立たない。戀愛問題でもさうである、戀愛論と云つた所が戀愛論は結構なことだけれども、助平も餘り感心しない、感心しないけれども絶対だといふ、どつちになつたか分らぬ、何を言ふのか分らぬ、寢呆けて居るやうなものである。儒教の方はさういふへまなことはやらぬ、夫婦の關係は尊いものであるけれども、血氣盛んな時は色情を慎まなければ身を誤るといつて戒めてある、『少き時は血氣未だ定まらず、之を戒むること色にあり』男女關係は大切なことだけれども、年の少い間は助平根性の者はやり損ふ、氣を付けること云つてある、これは萬世滄らぬ所の真理である。さういふやうに倫理上の概念といふものをピシヤンと教へる、『父を無みし君を無みする者は禽獸に非ずして何ぞ』御主人を忘れたり親を忘れたりする者は是は犬コロ同様なものである。ピシツと應へる所が儒教にはある。『徳は本なり、財は末なり』道徳が根本で經濟は後に起る、『本を外にし末を内にすれば、民を争はしめて奪ふことを施す』或は『物に本末あり事に終始あり、先後する所を知れば則ち道に近し』とちやんと短い言葉で斷案が下してある、徳を忘れて財に走るやうな者は本末を顛倒して居るものである、頭に草履を穿いて歩いて居るやうなものだ、金が有難いと云つて、唯何でも金さへ儲ければ宜いといふ考で金を儲けて來て家庭で威張つて居る者は、乞食をして來て妻妾に威張つて居るのと擇ぶ所がない。孟子の中に、

或る男が毎日墓場へ行つてお葬式の時分に、硬飯か何か竹皮包のやうなものを澤山貫つて歸つて来て、今日も何處其處に大宴会があつて御馳走が澤山あつた、俺は交際が廣いから此通り二包三包もある、これが何處の宴会の御馳走で、こちらのは何處の宴会の御馳走だといつて妻妾に誇つて居た。さうして今日も大宴会、今日も大宴会と云つて毎日出て行く、そこで嫁や妾が少しおかしいと思つた、どうも良人さんいつも宴会々々といふけれども、此御馳走の包み工合は宴会のとは違ふ、交際が廣いだらうといふけれども誰も友達の訪ねて来たことがない、一つ調べて来ようぢやないかと云つて、嫁と妾が共同して、そつと後から尾行して行つた。所が其夫は葬式のある所、染井の墓地のやうな所、青山の墓地のやうな所、或はお寺のやうな所へ行つて、さうしてもう一つ頂戴、もう一つ頂戴と云つて供物を貰つて歸つて来た。今度は嫁や妾の方が先へ歸つて来て、二人が相抱いて泣いて居る。一身を托する良人が斯んな淺猿しい事をして居るとは何といふ情ないことだらうといつて愁いて居ると、良人さん得々として歸つて来た、二人が知らぬ顔をして居ると、やはり例の通り御馳走を廣げて今日も斯んなに澤山貫つて来たといふ、これはあなた青山の墓地で葬式の時分に貰つたのぢやありませんかと云はれたので、其男始めて其非を悔いたといふ話がある。世間で錢ばかり儲けて自動車に乗つて歸つて妻妾に誇るといふのは、此乞食と同じものだといふことをちやんと聖人が教へて居る。斯ういふ言葉があるがどうだといつて、びんと聽かしてやると、どんな拜金主義の奴でも此言葉一つで以て乞食と同じことだといふことを教へることが出来る。それを講釋して聽かすことを學校に於ても、家庭に於てもやる必要がある。儒教の精神を能く教へれば、そんな馬鹿を拵へたくても出来て行かなくなる。それでも宜い加減に人間は金を愛するのであるから、今のやうに實利主義であるとか、經濟が大事であるとか、生活問題パン／＼といふことはかり言つて居つたならば、社會は必ず腐敗してしまふ、そんなことを決して西洋にかぶれる必要はないのである、『徳は本なり財は末なり。本末、を知れば道に近し』これで宜しいのである。

左様にして總て儒教といふものは徳目概念といふものがある、忠なら忠、孝なら孝といふ言葉にちやんと解るやうになつて居る、親には孝、君には忠、さういふ一つの言葉、これは儒教でなければ分らぬ。儒教がなければ忠と云つたら是は雀の鳴聲になつてしまふ、君には忠、それは何ですか雀の聲ですかといふことになる、それが忠といふ字があり、それに對する所の教があつて、簡単に『克く忠ニ克く孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ナリ』といふことで解るやうになつて居るのが、これが儒教の有難い所である、まだ澤山あるけれども、さういふ點は佛教よりも儒教の方が宜しい、惟神の教よりも宜しい、西洋の學問よりも宜しい。これが何時までも日本人間に儒教を傳へなければあるべからざる所以である。(次號完結)

法國冥合の意義

小林 一郎

今日は紀元節といふ洵に目出度い日であります、この統一國が創立致しましたのもこの日であります。私共始終こちらに出入する者としては重ね々目出度い日と申さなければならぬのであります。又二月といふ月は唯紀元節を御祝ひするばかりでなく、日蓮聖人の御降誕もこの月の十六日であります。又日本に佛教が弘まるに就て特に大きな御功績を御擧げになりました聖徳太子の御降誕もこの月であります。兎も角も私共佛教を信じ、又法華經を信する者にとつて特に意義の深い月と存じます。この月に當りまして皆様に御目にかゝつていろいろお話を申上げることが非常に意義の深いことと思ふのであります。(中略)

要するに今非常時だと言ひながら、國民全體の緊張した気分が、まだ足りないといふことは言へるのであります。何も私は人々を攻撃するのではない。皆が萬事に氣を付けて、出来るだけ質素にして弛みのないやうにして

行かなければならぬ。非常時々々々と聲ばかり高くて、一向實際に於て非常時としての實行をして居る人が少いといふことは、實に慨かたしいことでもあります。斯ういふことで、今當面の戦争が片付いたところで、後が巧く行くかどうかといふことは、お互に眞面目に考へなければならぬことでもあります。

何としても人々がもつと能く考へなければいかぬ。靜かに考へて反省しなければならぬ。自分の今日の生活がこれで宜いかどうかといふことも考へなければならぬ。自分の骨の折りがこれで澤山かどうかといふことも能く考へなければならぬ。皆が反省して、振返つて見て、もつと改むべきことはどしどしと改めて行かなければならぬと思ひます。ところがこれが中々難しいのです。人間は行掛りに執はれる癖を持つて居る。今までやつたことは悪いと思つたつて中々直らぬ。それから今までやらぬことは良いと思つても中々やらないのです。こ

れはどうも人間の癖でせう。所謂執着といふものが人間に始終ある。今までやつて来たから、どうも朝寝していけない、朝早く起きよう、早起が良いと分つても今日は半端だから来月一日からやらう……(笑)これはいけないと思つたら、その日からやつたら宜い、來月を待たないだつて宜い。どうも良いと思つても、直ぐやらない。マア少し待つてと言ふ。又悪いことをやめるのにもどうも執着があるのですね。執着といふものを捨てなければいかぬ。悪かつたと氣が付いたら、その日からやめなければいかぬ。これは良いことだと思つたら、その日から實行する。この勇氣といふものがなければ、世の中は良くなるものぢやないと思ひます。中々これは實際やつて見ると難しいものです。どうも執着がある。何か聽いて直ぐ實行する人といふものは少い。マアモウ一寸待つて見るといふやうなことになつて居る。さうすると又元へ戻つてしまふ。だん／＼にやるといふことはいけない。昔支那に孟子といふ賢人があつて、孟子が梁の惠王といふ王様に政治の取り方を改めることを注意した。所謂王道を行ふことを注意した。さうすると梁の惠王が聞いて、それは尤もだ、あなたの議論を聞くといふと如何にも尤もだから、自分もその王道を以後行ひたいと思ふけれども何分永い間の習慣だからして急には行かない、だん／＼

改めて行く積りだから、その積りで居て呉れと言つた。ところが孟子が、それは怪しからぬ、悪いと思つたら直ぐやめなければならぬ。例へばあなたの家の御家來に隣の家の鶏を毎日盗む人があつたとして、その家來が鶏を泥棒するのはいけないとお諭しになつて、その家來が成程御尤です、泥棒はよしませうが、今までやつて居たものを直ぐよされませぬから、最初一日置きにして、それから二日置き、三日置きにして、だん／＼に盗らないやうにしませうと言つたら、あなたはそれを許しますか。泥棒は悪いと分つたら、その日からやめなければいけない。それを一日置きにとか、二日置きにとか、それではいけない、泥棒は悪いと分つたら、直ぐその日から止めなければならぬ。新様に悪いことは直ぐやめなければならぬ、又良いことは直ぐやらなければならぬと言つて大いに窘めたといふ話があるのですが、人間は執着を去らなければいかぬ。その勇氣が必要なのであります。ところが普通はそれが出来ない。それで信仰なんぞを持つて居る人は、その信仰の力でこれを直さなければならぬ。佛様を信する、佛の教を守るといふ、佛様に對して悪いから自分の勝手なことをしては相濟まぬといふやうな、人間以上の大きな力を捉まへて、この佛様に誓つて自分の悪いことは今日から直さう、良いと思つたら今日から

しようといふ、斯ういふ勇氣を養はなければならぬ。信仰の力があればこれは出来るのです。マア寒中にも寒修行においでになつた人も澤山におありだつたさうだが、これも信仰の力で出来る。信仰の力といふものは寒さ位に勝てる。萬事さういふやうに私を捨てるといふことは信心といふことを基礎にしてやりますれば確かに出来るのであります。人間にはこの己を捨てて、人の喜びを共に喜ぶといふ本性がある。何も佛様が無理な教を御興へになつて居るのぢやない。人間の本當の性質に基いて教を御興へになつて居るのだから、その所は能く呑込まなければならぬ。兎に角人はどうでも自分さへ宜ければといふやうなことをよく考へるやうだけれども、併し教も何も知らない人が、極く狭い範圍に於ては、人の喜びを共に喜ぶといふことは随分やつて居る。例へばお母さんが子供に乳を飲ませる時になるとやつて居る。夜中に子供が泣き出すと、お母さんも起き出してさうして乳を飲ませて居る。子供が乳を飲んで腹一パイになつてニコニコ笑つて来ると、やはりお母さんも一緒に笑つて居る。夜中に起きて子供に乳をやつて幾らになるのだらう……などといふことは考へない。(笑) やつと子供が笑つて来れば、一緒に笑つて居る。さういふ時に自分を捨てて居るのです。自分のことを考へてやしない。それか

ら往來を歩くと、よくお母さんと娘さんが歩いて居る。この頃は背脊が高くて、お母さんより娘さんの方が背が高い。さういふのを喜んで見て居る。どうも斯う娘を見上げて、自分が小さくなつて、それで喜んで居る。何としても自分より娘の方が高い、怪しからぬと思ふ人はない。喜んで見て居る。(笑) さういふことを皆やつて居るのです。この心持をもつと擴めれば宜い。唯自分の子供だけは褒めるけれども、他の人は知らない。自分のことには盡すが、他人の爲に自分が力を盡すことはしないといふことは、これは狭い範圍に人間の本性が入つて居る。他の人の範圍に行くといふと、まるで逆になつてしまふ。これはあり勝ちなことです。これもよくあることです。電車のなどで久し振りに人に會ふ。ここへお掛けなさいと言つて傍の方へ坐らせる。これはよくあることです。ここへ掛けられるよと言つて他の人を押し飛ばす。ここへ掛けられるよと言つて他の人を押し飛ばす。(笑) どうも友達には親切だけれども、他人には随分ひどいことになりませぬ。よそから見ると馬鹿々々しい。それをやつて居るのです。面白いことです。ですから靜かに振返つて見ますと、自分の生活の中に佛と一致することもあるし、即ち己を捨てて人の喜びを喜ぶといふこともある。又佛と一致しないやうな洵に間違つたことも多い。要するに吾々は時々佛様に一致する

やうなことをやる。時々佛様に背中を向けるやうなことをやつて居る。ここを振返つて見なければいけない。無理にやれといふのではない。まるで出来ないことならば、佛様が何と言はうと、神様が何と言はうと出来ませぬ。友達や子供の爲に自分を捨てるなら、もつと大きくしたら宜しい。斯ういふ修養が日常の上に現はれて行かなければならぬのであります。

さういふやうにして、皆が私を捨てるといふことになりませぬば、所謂協力一致といふことが出来る。協力一致のことを聖徳太子は和といふ言葉を以て表はしていらつしやる。それはモウ誰でも知つて居ることですが、「以和爲貴」といふのは私を捨てる、自分を捨てることです。唯仲好くするといふことではない。仲好くするのにも色々な場合がありまして、例へば何か儲かることがあると、儲けの爲に人が集つて仲好くする。逆に世間では儲からないと思ふと敵になる。だから利を以て集まるといふことは、永く續かない。儲かれば宜いが、儲からないと敵になる。大きな池の中に魅をボンと投げてやつて、水の上に浮いて居ると鯉が澤山寄つて来る。あの鯉は仲が好いかといふと、魅があるから寄つて来る。魅を食つてしまふと離れてしまふ。世の中にはさういふのが多いのです。大變仲が好いナと思ふと直ぐ離れる。利害

の關係が反するといふと、昨日の味方は今日の敵になるといふやうなことさへある。それは和合でも一致でもない。ここで政治の悪口を言つて済まぬけれども、今までの政黨ナンてものが動もすればさうだつた。あの黨へ入れば儲かる、そこで入つて来る。利害が違ふと離れてしまふ。昨日の味方は今日敵になる。さうして敵同志になつて悪口を言ひ合つて居る。みつともない。これは全く利益を本にする。利益を本にして人が集まれば、利害の反する時には敵になるのは已むを得ない。實にこれは情ない。日本では明治天皇の御教慮で以て立憲政治になつて、明治二十三年議會が開かれて、色々な政黨が出来たが、今のやうに昨日の敵が今日の味方になつたりするモウ一寸も當てにならぬ。明治天皇は非常に御慈悲の深い天子様でありましたが、この様子を御覽になりまして如何にもこれは随分甲斐ないと思召したと見えて、明治四十年頃の御製に

あつまると思れば離るゝ大空の

雲にも似たる人心かな

大空の雲を見ると、集まるかと思ふと、又散つてしまふ今の議會を見るとそれだ。仲間になつて黨を作つた者が直ぐ敵になつてしまふ。實に空の雲みたいなので頼もしくない。こんなことでは國は容易ならぬ。世の中の様

子を見ると、始終今日の敵が明日は味方となつて一寸も分らない。利害を以て集まるからです。本當の和といふのは利害を以て集まるのぢやない。お互に國の爲、世の爲に力を盡すのが嬉しいと思ふ人が集まるならば、その集つた力といふものは決して弛むことがあるものぢやありません。でありますから、この和といふことの説明として——これは十七條憲法の第一條にあるのであります。が、憲法第十五條に至つて、この和の説明として——聖徳太子は「背私向公臣之道矣」これは第一條の和といふことの説明だぞ、「背私向公」といふことが詰り。といふことだ、銘々自分を捨てれば和合一致が出来る。何かの利害損得が相反するから和合が出来ない。人間が自分の立場ばかり考へて居れば、その考が一致しないのは當然です。立場が違ふから……例へば米を作つて賣る人は、賣るのだから米が高くなるやうに祈るし、逆に米を買ふ者は安くなるやうに祈るのだから、一體米は幾らにして宜いか分らない。兩方の意見が一致しないのです。今日は紀元節だから遠足しようといふ人は、好いお天気だがどうも何だか天気が悪くなりさうだ、せめて今日だけは好い天気にして呉れよ、明日になれば降つても構はない。ところが、明日旅行しようと準備をして居る人は今夜は降つても宜いから、明日は天気にして貰ひたい……

……雨は何時降つて宜いか分らない。(笑) 皆立場が違ふのだから、立場の違ふ人が自分の立場に執着して居れば、和などといふことは出来るものぢやない。それは皆私です。ですからその私を捨てて公に向ふといふことであつて、初めて本當の和といふものが出来る。斯ういふ風に教へられて居る。

併し人間が全く自分をなしにしてしまふといふことは出来るものではない。私を捨てるといふことは、自分の一身の爲に骨を折ることぢやない。捨てるといふことは自分を零にするのぢやない。自分を大きくすることであり。その所は大いに考へなければいかぬので、佛教の方の大乗佛教の言葉から言ふと、無我といふことと大我といふことは同じナンです。無我と言つたつて、自分が零になつてしまふのぢやない。小さい自分の急を捨てる、小さい自分の望を捨てる。さうして世の爲、人の爲、國の爲になることを喜びとする。それが自分をなくすること。自分をなくすることは自分を大きくすることであり。だから人間が自己を失つちやいけない。自分は生きて居るが、その自分といふものを小さい自己としないで、大きい自己とする。さうすれば世の中の爲になることが嬉しい。斯うならなければ本當ではありませぬ。このことを聖徳太子は「背私向公」といふ言葉を以

て言ひ現はしていらつしやる。その「背私向公」といふことは何に依つてやるかと言ふと、それは佛教でやれ。佛様の大慈悲の御心持を持つて學んで、自分の力で人を救ふことを喜びとするやうにならなければいけない。斯ういふことを仰しやつた。

佛は大慈悲を以て一切の人をお救ひになる爲に、その佛の教を學びさへすれば今假令こゝに佛は居らつしやらないでも、佛のお遺しになつた教の中には佛が宿つて居る。法華經を讀んで見ると、その中には如来の全身が入つて居る。お釋迦様はお經の中に入つて居るのだ。さういふことを仰しやつて居る。吾々は今の世で佛を信じて行けば委は見えないでも、お釋迦様の魂を入れてお遺しになつた教、一生涯の力を傾けて御説きになつた眞實の教である法華經を信じて居れば、今此處で面あたり佛にじかに教を受けると同じ心持が出来ると譯であります。それで行けばその教がだん／＼と自分に滲み込んで來さへすれば私を捨てるといふことは、自然に出來て來るといふやうに考へて、私共はこの場合心からこの非常な難かしい場合でありますから、この場合に吾々の信仰を勵んで、さうして佛に向つて掌を合せた時の心持をその儘移して自分の仕事を勵まふといふ積りにならなければなりません。それが別々ではいかぬ。うつかりするとその

信心といふことと日常の生活と別々になる。川崎の大師に厄除けに行つた歸りに墓口を捨て來た……といふ信心では困ります。併し動もすると世間では、さういふ風になり勝ちであります。日常の生活と離れた信仰は意味がない。斯ういふ風に考へまして今の時代をしつかりと認識すると共に、私共日常の生活の上はこの信仰を實現するやうに力を盡すといふやうに致したいと思ふのであります。

この記念すべき日に當りまして、私はこの事を一層深く考へるのであります。自分達の平常の望を私とその通り實行して居れば結構であります。なか／＼私凡夫であります。その通り實行が出来ないのであります。まあさういふ心持で信心を一つ日常の生活に活かして行きたいと思つて居ります。この自らさうして居ります心持を申上げまして御参考に供しました次第でございます。

(完)

本佛實在の宗教哲學(九)

河合 陟 明

八

十界皆成佛道といひ、萬法悉く成覺すといふは、佛教一貫の大理想である。果して釋迦一佛獨成なりや否やといふ如き論は、こゝには遙かに遠く超えてゐるのである。勿論現實と理念とを混同すべからざるはいふまでもない。しかし佛法究極の理念を萬法成覺と掲ぐるとき、翻つてその根柢を吾々自身の内面に求むるに、實在とは畢竟佛性であり、即ち佛性形式たる空諦ノエシスと佛性内容たる假諦ノエマとの、更に揆言すれば能覺性と所覺藏とより成る原理的無作の本覺性として、凡ての意識は佛性識である。所謂眞如・如來藏の中實理心なる覺自體であるのである。故に十界一具三千如是の性が、即ちこれ法體であり法性なのであるが、その十界性は亦た一佛界性に歸するのである。本來十性即一佛性であり、それは即ち覺自體における自覺の段階・理性的人格化の段階をなすといふことができる。差すれば十法界の相。融すれば一佛界の相、故に十如の因果といふものに就ては、三段の考察がなされ得るのであつて、それはまづ十界に並列的に交渉することを見るのであるが、次に、一層根本的には、たゞ善惡迷悟の二大別となるのであつて、所謂十二因縁における流轉門と還滅門、四諦における苦集二諦なる輪廻界の因果と、道滅二諦なる解脫界の因果、即ち又無明緣起と法性緣起との二方向となるものであり、予はこれを無明といふ點より見るとき、萬有の運動は無明動と破無明動との二方向であると稱するのであるが、更に深く一層根本的にはたゞ從迷至悟の一實の因果をなす、九界の權より佛界の實へ向ふ、所謂九權より一實へ向ふ所の一實をなし、一乘をなし、佛乘をなし、ただ破無明動をなし、即ち不覺より自覺への自覺體系をなし、行惡より行善への目的體系をなすものであることを知らねばならぬ。

勿論現實が當に必ず然りなのではなく、それは當爲であり要請なのであるが、然しその根柢にはなほ一層深い實在の根本動向があり要求がある。先にもいつた如くカント的 *Sollen* 當爲の奥底には *Können* 能力があり *Das Sein* 本有がある、法性がある、*Wissen* 知識の内奥には *Gewissen* 良心がある、佛性がある。眞に知識の十全性はいゆる *Adäquates* なるものは善を表し善そのものでなければならぬ。無明ならざる明は善の源泉であり、佛陀は覺者と名けるのであるが、その系列の最後には信仰客觀性が位せねばならぬ。即ち「觀心本尊」とならねばならぬ。しかし更に根柢的に、單に天台的な「觀心」そのもののみを考察するも、それはまさしく實在の根本構造が覺自體なることを自覺するのであつて、觀心とはその覺自體の内面的自己反省即ち自覺に外ならぬことを知るに至るのである。

宇宙は何等の定命論的必然ではなく *Providencia* としての目的觀でもなく、基督教的或はヘーゲル的な振理史觀でもなく、ブルンナーの批評する如く *geschichtlicher Entwicklung-sophismus* 樂天的發展史觀でもなく、或は又スピノザの如く意志自由を否定して、大いなる必然の鐵鎖の裡に諦觀と安住を求めんとするものでもなく、或は又「時」は最後には打ち超えらるべきものではあるが、しかし單に時は *Solenn* 假象ではなく、否時こそ吾々の生命であり、時こそ無限なる *Erfüllungshoffnung* 充實の希望のその充實過程なのであり、所謂 *das Einzige* 個人が大いなる菩提を成就し *Endgeschichte* 超歴史に到達し *Ewigkeit* 永遠そのものに躍入すべく *Passionen müssen* 通過せねばならぬ道なのであり、かくして *Weltgeschichte* 世界歴史は *Sohn* 幻ではなく、終又、吾々は單に外面的規制たる生物學的 *Tatologie* 目的論に従ふものでもなく、固より又唯物的・機械的な必然或は混沌・無秩序・無規律の裡に置かれてゐるものでもない。ショウベンハウエルの盲目意志に於てあるものでもなく、又ライブニッツ的豫定調和の裡にあるものでもない。凡てこれらの思想と異り、萬有の實相たる眞の根本實在は覺自體なるが故に、それは根本的に盲目意志ではなく、従つて吾々の人格及び行爲は、その本性に於ては常に超時間的自覺の根柢、即ち時の變化にうつろひなき永遠の今に於て成立つものである。カントが「時に於て萬物は變化するがしかし時自身は留まる *die Zeit bleibt*」といつたのはこの意味でなければならぬ。それは寧ろ心自身は留まるといふべきである。吾々の人格性の根本たる一心の覺性・佛性・法性・一心眞如そのものは、五百塵點の過去も五百塵點の未來も、すべてそれを超え、それを絶し、

それを包み、それを含んで、永遠そのものである。時における萬物の變化とは、かくの如き時を超えたる一心の人格性、即ち覺自體なる佛性そのものが、自己の内容を要求して、その所覺藏の内容を限定し、開發し、掘鑿し、積聚しゆく、その限定作用・積聚作用の推移の跡方に外ならない。五蘊とは積聚に名け、衆生に名け、輪轉伽羅即ち假我に名くるのである。しかし佛性の働き、いはゆる *theoretische und praktische Vernunft* 理論及び實踐理性の働きは、深い意味に於て寧ろ有我といふべきである、涅槃經・大法鼓經等にいはゆる佛性有我説を是といふべきである。かくして萬物は、特に自覺的なる吾々の行爲は、その根本の深き要求に於ては、覺自體なる本性に根據し、そこに由來し、又それに適つて、實にそれは自覺への意志なるものであり、善を行つて覺りに達せんとするものである。それは自然的必然或は恩寵的必然ならざる、自覺的自由にしてしかも最初本來よりの普遍の動向であり、即ち實在本有の能力であり目的であるのである。いはゆる三世の不滅の生命とは、無作本來に時を超えたる己心の内に見らるゝ自己の影に過ぎない、歴史に過ぎない。

この意味に於て因果は、十界並列的と迷悟對立的と從迷至悟の一實との、三段の發展階程をなすも、究極してはたゞ一實諦としての法性の自覺的發展體系となり、一佛乘としての佛性の因果的開展體系となるのである。一々個々の存在が即全宇宙的であり、いはゆる *microcosmos* 小宇宙は *macrocosmos* 大宇宙であり、三千如是の種々性相を本有するも、究竟しては一相一味・解説相・離相・滅相にして一切智地に到らんとする、佛界の如是大果報性相義を内在し、そこに向つて生成發展せんとするものである。この故に天台は、法華經方便品における宇宙原理論としての諸法實相・十如因果の解釋に於て、まづ最初は十如を約二十法界一以て通論するも、次に理念の因果を示して價值と實在との統一を求むべく、從つて十如をただ約佛法界一、更に約三離合、約位、而して云く、

如是相者、一切衆生皆有實相、本自有之、乃是如來藏之相貌也、如是性、即是性德智慧第一義空也、如是體、即是中道法性之理也、是爲三德通二十法界、位々皆有、十界相性權實開合、差別若干、以三平等大慧一如實觀之、究竟皆等(文九)

と一佛性體系の如是の因果に結んでゐるのであつて、これ即ち十界三千は一大自覺的體系なることを表す、換言すれば、萬有は一大佛性向覺體系であるのである。

如來觀^三知、一切諸法之所歸趣、亦知一切衆生、深心所行、通達無碍、又於諸法、究竟明了、示諸衆生、一切智慧、と佛陀は法華經に説かれ、天台また摩訶止觀に於て、於諸法中、皆見實相、是名佛眼、といつてゐる如く、吾々の存在の眞の相は、否、森々羅々たる法界の萬象は、大觀し來れば等しく佛性向覺の進程に立てるものといふべきである。しかし佛性とは何ぞや、それは覺自體であり、その形式は能覺性であり、その内容は所覺藏である。その所覺藏の内容とは何ぞや、それは法性なり、法性とは法界の本性なり、その法界の本性たる法性とは性善性惡なり、それは即ち性そのものに於て先驗的に善を有ちまた惡を有つ、故に台荆既に云く、理者法界無碍、無染而染、即理性毒也、如來不斷性惡、聞提不斷性善、性德但是、善惡法門、故不可斷、一切世間無能毀者、如魔燒經卷、豈能令於性法門一盡、縱燒惡諸、亦不能令惡法門一盡、性既に然り、惡も無作本有なる根據を有つ。然しながら現實の惡・現象の惡・現實吾々の罪惡そのもの・性惡なる無作先驗的なるもの・修惡なる有作經驗的現實そのものは、いづこよりして發し來たるのであるか。

それは先にも屢々いつた如く、*Noumena* 本體たる覺自體を *affizieren* 觸發するものは *avijja* 無明の原理である。無作の本有をして不有たらしめ無たらしめてゐるものは無明である。

實在の動する所以は根本無明の爲に外ならぬ。宇宙原因論は無明論である。否、法性の性善性惡プラス無明論である。それによつて本有體系における能覺性と所覺藏、空諦と假諦、ノエシスとノエマ、形式と内容、超越と内在、主觀と客觀、能有者と所有物、知と有、心と物、人と法、人格と真理、自覺と實在、自由と必然、自我と宇宙、等々のあらゆる原始的對立の未分のアプリアオリたる先驗的統一が、經驗的現實に分裂せられ、矛盾・相剋・否定・争鬭の生の現實を惹起し來たるのである。摩訶止觀に所謂、無明共法性、出生一切、隔歷分別、故名世諦、そこに所謂無明緣起として、即ちいはゆる陰妄の一念の所與的現實として、空間的にはあらゆる自然界におけるカント的なる *sinnliche Mannigfaltigkeit* 感覺的雜多性と、時間的にはあらゆる歴史的世界におけるブルンナーのいはゆる *geschichtliches Auf und Ab* 歴史的浮沈消長との、而もそれは自己と他者の、社會的にも、國家的にも、民族的にも、人種的にも、或は *Schicksal und Freiheit* ヘーゲル的なる運命と自由の、或は理性と情操の、或は知識と信仰の、或は真理と權力の、或は文化と戦争の、或は生命と敵對者の、物心二面有形無形に亘るあらゆる *struggle for existence* 生存競争

争 Kampf für Kampf 闘争對闘争、生命を賭しての戦ひを戦ふ、食ふか食はれるかの否、正邪善惡の、賢聖と魔軍との、戦ひを展開し來たるのである。而して之に對して、ここにあらゆる自然科学と精神科學と或は歴史科學との、又政治・法律・經濟・産業、乃至、道德・藝術・哲學等、而して實に悠久無限なる法界歴史における吾々自身の生命の實相否妄想を反省して、悚然たる戦慄と慚愧と懺悔と一大自覺と、魔訶止觀にはゆる若己若他、並緣三無始經歴之境、ここに自慙悲他して、上には深達三不思議境、淵奥微密、下には博達三慈悲、遍覆三衆生といふ、無限なる大向上の發菩提心より廣大なる四弘誓願の行願を發し來たる宗教との、あらゆる學の體系と文化の諸分野と生活秩序と永遠の信仰とが、要請せられ開拓せられ、その生命への意志・文化への意志・眞理への意志・菩提への意志なるものの發展の方向に於て、いばゆる知識客觀性の發展といひ、具體的一般者の自己限定といひ、自覺的體系の高次の還元といひ、又生の目的といひ、歴史の理念といひ、或は本有體系の因果一實をなす自己充足的發展統一といふべきものが成立つて來るに至るのである。これを一言にして予は佛性の向覺・行善といひ、或は法性意志の破無明動といひ、又發眞正菩提心の無限向上と稱するのである。

かくの如く實在の本質そのものたる自覺に根據して、萬有特に吾々は、刻々に自由であり、且つ刻々にその行爲を貫いて因果的必要である。自由と必然と、即ち人格的と自然的とは、常に *durcheinander hindurch* 徹底的相互貫通をなしてゆくのである。しかもその人格性が即ち *Dringung des Geistes* 精神の飛躍が、稀薄になればなるほど、物的となり、*via inertia* 慣性に支配される。之に反し實在の本性及び目的に適ふ所の、即ち自覺への意志を充足し實現してゆく所の、善の實踐の道に於ては、定業亦能轉といひ、又轉重輕受といふ如き、特に宗教的なる福音的倫理的法則が行はれるに至るのである。實に吾々人間の、否萬有一切の、所謂十界三千・迷悟生佛總てを通じて、その個體的人格的生命の永遠不滅常住實在なることと、更にその生命を律しゆく因果應報の大法則とは、宇宙間萬古の大眞理である。而してその善の世界に於ては、特に宗教的色彩を帯びて來るのである。否加之ここには大いなる絶對者——獨斷的ならずして、優然として人法一如でありつつ、しかも全智なる全能者の、國慈無窮なる超絶的感應の協力が加はり來たることをも知らなければならぬ。

自由と必然と協力と、否單なる自由や必然ではない、寧ろ合目的・價值的・善の實踐の世界を自覺し且つ意志するものとしての意味に於て、その自由は向上であるのであり、予の所謂佛性向覺と本佛統覺・佛性行善と本佛淨用といふ、二面結合の一實諦或は一實道、所謂一大佛乘としての統一體系の意味に於て、「向上と因果と感應」との三者を、予は法界三律と稱するのである。スピノザやカントやヘーゲルや、乃至現代の龍兒たる人間學や歴史哲學等における世界觀は、皆ここに開顯せられるのである。

さて再び一實因果としての自覺の問題、特に智的自覺の問題、即ち佛性行善の中に於ても特に向覺といふ明・法性・如實智を求むる問題、般若成就者としての佛陀の知見を求むる問題に還らう。根本實在は無作に本有と本覺と本行との、相即一如なる圓融體系である。その特質を一言にしいへば覺自體なる所に存する。勿論これは原始的・先驗的な理としての意味における覺である。かくの如き法性眞如は總在三念、別分三心。その本有の内容を尋ねれば、心具三千色具三千・一色一香無非中道であり、乃至聲味觸法等、所謂法々塵々悉く三千を具せざるはなく、既に三千を具すといはば、これ一切諸法無非心性、いはゆる一性無性三千究然・一念無念唯內體三千。心性無外攝無不周、十方諸佛法界有情、性體無殊なるものである。

かく實在は本來自覺的にして、しかも現實は不覺的なるが故に、飽くまでもその充足を意志し、ここに先驗的無作の自覺性と行爲的自由性とが、直ちに經驗的のそれとなり得る、否なるのである。それは只一念の運用である。かくして原理的なる實在の本質が現實的なる人格的自覺となり、自己の意識的事實として、知識的内容として、永遠なる眞理の直觀として、ライプニッツの所謂永久眞理が事實眞理として體驗されるのである。本有の意味に於ては原理的內在的なる意味形象の體系としての眞理群が、ケルケゴールならぬと一種の *Wiederholung* 再把握として、人格の智性の食みゆく無限の内容となる。プラトニーのイデア或はエイドスが現實事實の上に彫刻されてゆく。根本實在は先驗的意識であつて、本來有るものは本來知るといふ形に於てあり、又本來働くといふ相に於てあるものであるが、それが此に至つて純粹創造的・生産的なる、即ち生命ある發展作用として現れ、行爲は純眞なる實踐となり、知識は無限に意志的となり、意志は無限に知識的となり、理性的となり、直觀的となる。意志と理性とは相即的であり表裏一體をなす。これが眞如理本覺體系の現實的自己體系化である。しかし先にもいつた如く、存在は單に可能から始まるのではない。現實は單に觀念から始まるのではない。それは只無始の現實であり、無始の事であり、即ち十界事常であ

萬法は眞如一理の法性より出入開閉するのではない、眞如緣起は常に現實の内面に行はれてゐる。隨緣常住であり、假諦常住であり、色心常住であり、世間相常住であり、感應常住である。眞の實相は常に眞如緣起的業感緣起である。前者は内面的普通の基礎根柢であり、後者は常に現實の事實である。事理不二といふことすら未だし、事體理徳といふべきであつて、理は内面に包攝せられ、個性人格は常に實在の全象を宿す。徹底的なる現象即實在論である。而して時間と空間にその起源と邊際を尋ねることはできぬ。而してその内容を充満するものは實在の質即ち眞如法性の理と、實在の量即ち十界三千の事である。而して業感緣起の業とは常に善惡迷悟即ち無明的と法性的との二方向に向ひオーガスタンのいはゆる *civitas diaboli* 惡魔の國と *civitas Dei* 神の國とは常に吾々の背面に開かれ、魔界と佛界と何れの路へも自由に通じ得る。しかもその本質に於ては互具融即し、その要請に於ては向覺意志である。故に天台云く、否、淨名經に云く、行非道、通達佛道、魔界即佛界、一切諸法、皆是不思議解脫法門に入り得るのであり、龍樹のいはゆる諸の愛論見論は、直ちにまた佛法の正知正見正念正業に入り得る菩提資糧論となる。個々無限が相互に、否、個と全法界とは實に求心的にも遠心的にも、收斂的にも發散的にも、包攝的にも開發的にも、その相互限定作用の關係は悠久洪大のものである。

然しながら彼等西洋思想の、特にカント以後の所謂 *Geisteswissenschaft* や又現代の窺兒たる人間學や歴史哲學等も、未だ吾々自身の法界的大生命の自覺に達せず、絕對歴史ともいふべき法界歴史の實相史觀に來らず、法界社會たる十界常住の互具と感應に入らず、されば未だ大涅槃當樂我淨の眞實在界を求めず、知らず、信ぜず、解せず、又安んぜず、況んや本佛常住の大涅槃音 *recessus Nirvanolium* に至つては斷えて知る所がない。ましてや吾々人間が是くの如き大覺位に大向上を成し遂げてつひにそこに到達し得るといふ如きことに於てをや。それは夢想だもせざる所であるか、乃至は却つてそれを *phantom* 假象とし幻として、人間！に對する無限の可能・無限の希望を、みづから封鎖するが如き宿命的ともいふべき根本無明の闇に閉されてゐるのである。現代は未だ殆ど人類歴史よか人間世界とかいふ如き、全存在の一小部分・眞實在の一象面、その一種の平面的限定、或は單にその有限的連続を見てゐるに過ぎない。所謂絕對を論じ實在を説くべき哲學界・宗教界自身が、未だ究竟の大涅槃界や常住本佛の大實在を知らぬ。人々

は未だ救はれてゐない。現代の人類と文化は未だ眞に救はれてゐない。それが實に眞の文化の危機であり、理性の危機である。現代の危機神學はその代表的なるものである。カント的なる理性批判は、却つてカント的思想そのものに對してなされねばならぬ。否彼は既にこれをなせりといふであらう。しかし彼にあつては絕對の認識はつひに斷念し抛棄せられたのである。然しながら眼が一たび開いて、歴史が所謂人類歴史より子の謂ふ所の法界歴史に進み入るとき、ここに歴史は必然に宗教の王國に辿りつき、歴史哲學は宗教哲學とならねばならぬのである。

吾々の所謂意識現象は、如來藏中實理心なる覺自體としての先驗的意識が、自己を壓する不覺の闇を破らんとする自覺的限定として、原理的・本質的なる全體に對する部分の獨立である。無作の一大本有即本覺即本行なる根本的意識體系が、自己の全面を覆ひ、自己の全體系を閉せる、暗澹たる無明を突き破りゆかんとする意志的現實の部分の體系化である。此に於て先驗論理的なるものが推論式的となり、先驗心理的なるものが經驗的意識の積聚體系となり、行爲的直觀的反省的連續となり、*didaktisch* 比論的なる思惟體系となり、その斷えざる志向作用となつてゆく。實在は質量又は内包量を本有し、從つて濃度又は密度を本有する。その内包量の *Konzentrationsbestimmtheit* 濃度測定が自覺の意識である。それは叡智と情操と意志と、即ち眞善美の三方面に現れる、乃至至聖なるものとして現れる。それは畢竟佛性といふ本有理藏量の掘鑿作用である。反價值的にも價值的にも、五蘊とは積聚に名け、衆生とは時に名け三世の法に名く、しかし佛性は三世の法に非ず、否、諸法を至論し窮致すれば、未來今に非ず、皆不可得不可説、即ち予のいはゆる無作本有にして又はいはゆる超時間的第一義空なるものである。而して天台が迷門十妙に論ずる境・智・行三妙に次ぐところの位妙とは、この佛性の掘鑿作用即ち體系化の階程である。濃度測定の淺深と秩序化との進程である。ここに天台の教觀二門を一括して、綜合的にこれを論ずることができるのである。

即ち天台の教門における藏通別圓の四教の體系といひ、觀門における陰妄の一念・對・一心三觀といふは、この發展即還元の過程に當るといふことができる。それは所與・反省・志向・直觀といつてよい。これを本體と現象、即ち空假二諦、乃至三諦に於ていへば、迷妄の現象・本體的反省・現象的志向・體象一如の直觀といふ四段となる。第一の所與たる妄相とは、所謂陰妄の一念であり、此に於ては五蘊とは陰蓋善法であり、積聚とは生死重沓である。その陰妄とは感覺的雜多の自然界的空間としても、世界的動亂の歴史的现实としても、悉く諸行無常・諸法無我・一切皆

苦・有爲轉變の生滅現象である。それは悉く無明の所産である。第三の現象とは價值實現の現象である、道徳實踐の善の世界である。新たな歴史の創造の世界である。第二の本體とは單に知識的反省である、しかしそこには現實の自己及び世界、乃至その無始以來の生命の實相否妄相に對する、深き慚愧と懺悔と解脱の要求と救済の欣求と、而して人格的・意志的決斷とがあり、これが直ちに第三の善の實踐となる。佛教に於て智とは決斷に名く。 *Prasāngika* *Hathagacchane* 人格的決斷とその *Prasāngika* 實行である。即ち發菩提心と而して作行境願とである。第四の立場は、單に知識的なる本體的反省のみではない、第三の段階を経て、否常にそれと共にありつづ、從つて現象をも本體と共に含めて、又反價值をも價值と共に、その一切を双非し双照し、また即ち認識し體驗する、中道の行爲的直觀の立場である。斷えず動し如入し如しかも亦、不動し如而是如なる行佛性の菩薩行の連続と、その睿智的自覺の境地である。ここでは反價值をも價值化し、性善性惡を共に修善化するのである。眞善美乃至聖なるものは、皆この四教の教門及び陰妄に對する入空入假入中の觀門なる反省と志向と直觀との、一心三觀、乃至、十乘觀法の自覺的發展に於て體驗せられる。それは主觀的には大いなる *Gottebhūta* 人格鍊成となり、客觀的には *Mañuśya* *śāstra* の文化發展となる。それは一言にして佛性向覺の體系であり、佛性行善の開展である。而して之に對して最後即ち第五に、その行佛性の完成たり自覺の完成たる、佛陀の統覺と圓慈の淨用の境界が顯れて來ねばならぬ。而して因位に就ては向覺といひ果位に就ては統覺といふも、これを根柢よりしていへば勿論、眞如理本覺體系の現實的自己體系化であり、又その體系化の極限到達、乃至、極限超越である。即ち予の所謂眞如の先驗的統覺力の經驗的作用發展であり、且その完成であるのである。又行善といひ淨用といふも、因果二面・向上向下二門等しく、共に生佛を一貫して、大いなる善の實現であるのである。

南無妙法蓮華經

昭和十七年 紀元節 後二日

於 太平洋岸 (つづく)

年 頭 の 感 話

久 保 田 正 文

今日は磯部先生のお導きに依つて初めてこのお集りに寄せて戴きましたことを、洵に有難く存じます。私は、高等學校に居りました時分に、淺草の統一團へ参りました、屢々お教を承つたことがあります。また雑誌「統一」に依つて諸先生のお書きになつた物を始終有難く拜讀致して居るのであります。此處で私が未熟な考を申述べさせて戴くことは洵にお恥しい感も致します、併しお互ひにお祖師様のお教を戴いて居ります者が、世界の歴史が終に大轉換せんとして居ります今日に於て、自分の力が如何に微力でありましても、人の前で話すのが恥しいといふやうな虚榮心を抛ちまして、自分の足らない所は諸先生方から補つて戴き、また良い點は助長して戴くといふやうな氣持で、本來ならば進んでお話申上げるべきだといふ風に感ずる次第であります。

十二月八日は御承知の通り、私共日本の佛教徒に取つてはお釋迦様が悟りを開いたといふ成道の記念日に當つ

て居るのであります。あの日は右の意味をこめてのお勤めを済ませて歸つて参りますと、ラヂオがお互ひが聞かれたやうなことを叫んで居つたのであります、その瞬間私は、結局來るべきものが遂に來た、これで宜いのだといふやうな氣持がしたのであります。併し正直のことを申上げますと、皇軍の武力に就て、此處においての將軍閣下のやうな専門的な知識を持つて居ない私は、今晩でも敵の飛行機がやつて來るのではないか、さういふ時には自分はお祖師様と過去帳を抱いて、それから小さいながらもこの町の人達が去就に誤らないやうにしなければならぬ、また、宗門の役所の指示をどうすべきか、といふやうなことまでも、お恥しいながらあの時は實際さういふ氣持がしたのであります。併しながら今日になつて見ますと、——決して安易な樂觀は許されせんし又此の爲に命を捧げられた英靈が澤山ある譯ですから、吾々はよい氣になつてはならぬのでありますけれども、

本當を申すところ、我が國の力といふものを本當に認識して曾てお祖師様が仰せになつた「一國浮提第一の本尊此の國に立つべし」と云ふお言葉が、單なる信者を激勵する爲めの大言壯語ではなかつたといふことを述べんと感ずるのであります。新聞を見ると、マレー半島の王様達が皆皇軍に懐いて來るとか、又ボルネオの何とかいふサルタンが日本の部隊長を迎へたといふやうな、お伽噺のやうなことが出て居りましたが、畏れ多い話であります。只今の皇太子殿下の御成年式といふやうな時には、あゝいふ人達が皆日本の國に來朝して、日本の皇室を太陽と拜む時が來るといふことを申しても、誰も少しも不思議には思はないと考へます。さう致しますと、全世界の人々が來て履み給ふべき戒壇がこの神州日本の地に築かれるといふことは洵に明かなことである。斯ういふ風に考へる次第でありまして、今年のお正月は餅も少しもお屠蘇も祝ひませんし、門松もありませんが、併しこんなに朗かな氣持でお正月をお祝ひしたことは、こゝ數年來ないと思ふのであります。

あのハワイ沖の海戦、マレー沖の海戦の記事を読んで見ますと、私は十數年前、アメリカの社會學の方の専門雜誌に出て居つたことを想ひ出すのであります。それはカリフォルニアの移民問題の後で、或る社會學者が、日本、更に又面白いことは、將來の戦争の武器の最も優れた物は飛行機と潜水艇であらうが、これに對して、一番適應した肉體を持つて居るのは日本人だ、飛行機の上では大きな身體をして居ると重量が重い、又操作が自由ではない。潜水艇の内に於ても、極端に空間を節約して使つて狭くした中で、長い間辛抱するといふことは、どうしても坐ることに慣れた日本人でなければ出來ないのである。又日本人の目を見る、あの黒い澄んだ目はどんな強い光線の中でも、語り暗い所でもよく前方を見透す目である。又横の方を見る視力に於ても日本人の目は極めて優れて居るといふやうなことを言つて居ることを私は想ひ出したのであります。更に又其の人はさうは言つては居なかつたけれども、陸戰に於ける大切な武器としてタンクがある。此のタンクの内に於ても極めて狭い所で辛抱強く作戦して行かなければならない譯でありますから、さうすると飛行機に於ても、潜水艇に於ても、亦タンクに於ても、一番適應した肉體を持つて居るのは日本人であるといふことが出來ると思ふのであります。併しながらさういふやうなものより、何よりも大事なものを其のアメリカの社會學者は見落して居る、それは私共お互ひが持つて居るところの、「天皇陛下萬歳」と叫んで喜んで命をお國に捧げるといふ此の強い精神力であります。

本人といふものは決して輕蔑すべき民族ではない、恐るべき民族であるといふことを申して、日本人が武力に於て優れて居ることを實證的に證明して居つたのであります。それに依りますと、此のカリフォルニアの隅から隅まで耕された農園を見るが宜い、其處には立派な果實や、蔬菜が育つて居る、一體これは誰のお蔭であるか、日本人のお蔭ではないか。白人の勞働者が成し遂げ得ない事を日本人がやつて居るのである。そこまでは宜いのでありますけれども、其の先が面白い、結局それは何であるかと言へば日本人の腰の力だ。語りしやがんで草を取つたり、小さい害蟲を一つ／＼驅除するといふやうなことを長い間出來るといふのは日本人の肉體的特長だ。白人の勞働者はしやがむことの辛抱が容易に出來ないのであるから、祖先傳來しやがむことに慣れて居る日本人の力である。或る社會學者は、世界各民族を日常の舉措動作に依つて二つに分けて居ります。一つを立俗と申し、一つを坐俗と申し居ります。立俗といふのは、平生の日常生活に椅子や寢臺を用ひる生活をやつて居る民族、坐俗といふのは、お互ひ様のやうに始終坐る生活をして居る民族であります。そして、文明人の中で坐俗であるのは日本人ばかりであります。それで吾々はこれから坐る稽古をしなければならぬといふことまで言つて居ります。

これはどんなに日本人を研究致しましても全く西洋人には此の氣持は解らないと思ふのであります。大體日本の武の精神さへも彼等には解らないと思ふ。詰らない話ですが、私がロンドンに居つた時に、町の子供が兵隊ごつこといふやうな遊びをしないことに氣が附いて、向ふの人に、日本では子供は兵隊ごつことをして遊ぶけれども、此の國では兵隊ごつことをして居ないがこれは何だか妙だと申したら、其處の家の細君が、あんな野蠻なことをさせるものかと私に言つて居つたのであります。成程あゝいふことを野蠻といふ風に見るのだなと思つて參つたのですが、それから皆さんも御存じの野口米次郎さんと或る時一緒にになりまして只今の話をした所が、野口先生が言はれるには、自分はまたそれと逆の面白い話があつた、それはアメリカ人を連れて銀座を散歩して居つたら、玩具屋の店に武器の玩具ばかりある、それでアメリカ人は、日本人は何といふ野蠻的な人間だらう、子供の情操教育のための大事な玩具屋に武器ばかり列べて置いてどうするのだらうと言つて居つたが、全く日本の武の精神といふものは彼等には解らないのだねといふことを話し合つたのであります。此の私共の持つて居る武の精神といふものが解らなかつたればこそ、今日のやうな結果になつたのではないかといふ風に考へるのでござい

ます。

併し私共としてこゝで本當に考へなければならぬことは、實は此の先だと思ひます。即ちそれは將來の文化建設をどうするかといふことにあると思ひます。多くの人がラヂオ等で感情的な強い言葉を吐いて居りますけれども、其の響きの中に於て私共を本當に安心させるやうな、先の先を見透したやうな立派な指導精神が少いことを私共は非常に淋しく思ふのであります。昨日要路の某氏の話を聞いて居りましたが、仁徳と、聰明と、強健な肉體がなければこれからの大東亞を支へて行くことは出来ないといふことを申して居りました、全く其の通りであります、情で其の仁徳と、聰明とを一體どうして得たならば宜いか、具體的なことになると思ひます。非常に難かしい問題だと思ひます。私共よく小林先生から伺ふのですが、白樂天が道林禪師に佛敎の極意を聞いた時に道林禪師は「諸惡莫作、衆善奉行」と答へたので、白樂天が、そんなことは三歳の童子でも知つて居るではないかと言つた所が、三歳の童子も知つて居るが、七十歳の老翁もこれを行ふことが出来ないと言つたといふ話であります。これはよく「言ふは易く行ふは難し」といふ風に淺く解決されて居りますけれども、私共は問題も持つ

ことを考へないのであります。これは一つの具體的な事實であります、私共はそれと同じやうなことを始終やつて居ると思ふのであります。

又嘘を吐いてはならぬといふことは知つて居ります、併しながら知らないで嘘を吐いて居る、或は知らないで悪い事やつて居るが、それに氣が附かずに生涯を終つてしまふといふのが私共の一生ではないでせうか。詰らない話を申上げますが、私、アメリカを横断して日本へ歸つて來ます時に、汽車の中でアメリカ人のお婆さんと懇意になりました、其のお婆さんが——これもアメリカ人の日本に對する知識の一つの證據になる譯であります、**「日本に汽車はあるか」と聞くのです、さういふ質問にはよく慣れて居りますから「勿論あります」と答へました、其の次に「日本には電車があるか」と言つて聞くものですから、少し此の時はムツと致しまして「勿論電車もあります」斯う言つて答へました、さうすると最後に「日本にミシンがあるか」斯う言つて聞くので益々私は憤慨して、「勿論ある」とも、私の家内も一つ持つて居ります」斯う言つて堂々と答へてしまつたのであります。さうすると其のお婆さん大變感心したやうな顔をして、三井とか、三菱とか何とか金持の名前ばかりいろ／＼申して、私を金持に扱つて呉れましたが、私は何も知りま**

でも善い事をしたのであります。悪い事はしたくないのであります。だから善い事をして悪い事をしないのは當然であります。併しながら何が善であり、何が惡であるかといふことが私共には解らないのであります。法華經の一念三千とか申す意義の一つは、世の中には絶對的な善もなければ絶對的な惡もないといふことだと言つても宜いでありませう、此の場合にどういふやうに行動するのが一番宜いかといふことが、私共の小さな智慧を以てしては解らない。能くあることですが、若いお母さんが腸チブスで恢復期にある子供を亡くして悲んで居る、夜寝る目も寝ないで子供の看病をしてだん／＼恢復して來たので、お醫者さんからもモウ直ぐ退院が出来ると言はれて喜んでゐる。子供はお腹が空くのでドロツブ一つ呉れと言つてせがむので、お母さんは其の子供についてドロツブ一つをやつたのが原因となつて、其の子供は到頭ぶり返して死んでしまつたと言つて歎いて居るお母さんがある。幾晩も／＼寝ないで看病をした其の慈悲が、子供のねだる一個のドロツブを退けることが出来なかつたのです。お母さんの愛情が深かつたから、こんなにもねだるのだから一つ位のドロツブは宜いだらうといふので、ウイやつてしまつたことが子供の命を亡くするといふことになつてしまつた。私共は其のお婆さんのお婆さんのお婆さん

せぬからそれに適當に應對してサンフランシスコへ着いて宿屋へ參つて、町を見物に行かうと思つたら、宿屋の番頭が「ミシンを呼びませうか」と言ふので、あゝミシンといふのは自動車のことであつたかと、私其の時初めて氣が附いた。自動車のことをミシンといふのはアメリカのカリフォルニア邊りの方言です。だからお婆さんの言ふことはチャンと順序立つて居る、汽車、電車があるかと言つて其の次に自動車があるかと言つて聞いた、所が私は物を謎ふミシンだと思つたから私の家内も一つ持つて居ると答へた。結局自分が嘘をいつたといふことをそれまで氣が附かずに居つた、其の時これだナと私は思つたのであります。私共は實際問題としては斯ういふやうに嘘を吐いたり、悪い事をしたりして居るのです。だから諸惡莫作衆善奉行といふことは眞に難かしいことである、斯ういふ風に考へざるを得ないのであります。それでありますから私は佛のお力に頼つて、又佛の大きな力を自分のものとして——日蓮聖人の言はれます妙力といふのは、自力でもなく他力でもなく、又自力であつて他力である、それが妙力でありませう、自力だとか他力だとかいふ風に分けることの出来ないものであります。そこで私共は廣く大きい佛の敎に縋り、南無妙法蓮華經を通してこれを自分のものに得なければならぬといふ

風に思ふのであります。

大東亞の建設をいふやうなことを考へて思ひ浮べますことは、ツイ二三年前に亡くなつたドイツの經濟學者ワーナー・ゾンバルトの事であり、此の人の書いたもので『資本主義の將來』といふ本がございしますが、其の中に面白いことを言つて居る。それは將來の世界は四つに分れる、一つはドイツを中心とし、ヨーロッパからアメリカへ垂れて居る葡萄の一ふさである、もう一つは日本を中心とし、東アジアのボルネオからオーストラリアに垂れた葡萄の一ふさである、もう一ふさは南北アメリカである、更にモウ一ふさはロシアといふものである、斯ういふ風に申して居ります。これは極く簡単に結論だけ申しますが、詰り廣域經濟といふことを考へて行けばさうならざるを得ないといふことを書いてあります。それは私は昨日飛行機の飛ぶのを見て居つてさう思つた。これが鎌倉時代であつたならばお馬揃ひといふ所であらう。鎌倉時代では馬が武力を運搬する交通機關の一番便利なものであつた、それに櫓で漕ぐ舟、此の程度であるさう致しますと統治の範圍といふものはどうしてもさういふ交通機關に限定されてしまふ。所がだんだんと交通機關が発達して参りまして、今日では航空機やラヂオが出来たのだから、どうしても國家が封建的なるものから大

きなものと成り、支配の範圍が廣くなつて、どうしても廣域經濟といふことになる。さうなれば世界は今言つたやうな四つに分れるといふのがゾンバルトの考へでありますけれども、今此の大東亞戰爭に就いて居る所を靜かに聞いて居りますと、此の東亞の地から英米の勢力を驅逐せんが爲めである、アジア人の爲めのアジアを築くのである、斯ういふことを言はれて居りますけれども、私共の考は、決して自分が偉さうなことを申すのではありませんので、お祖師様のお教からこれを申すならば、そんな相對的なことではないと思はざるを得ないのであります。若し假に今の世界が四つに分れるとするならば、今日吾々がやつて居るやうな戰爭がまた此の四つのプロツクの中に行はれざるを得ないのであります。大東亞戰爭といふやうな大きな精神的意義を持つたものは、さういふ相對的な、又南洋の富源を獲得するといふやうな、さういふ形而下的なものであつてはならぬといふことを感ずるのであります。

此の問題に對して豫言を與へて下されるのは、立正安國論をお認めになつた所のお祖師様の態度であると私は考へます。私は立正安國論といふものを斯ういふ風に拜して居ります、勿論此の安國論は佛教が基調であります、それは鎌倉時代の日本の民衆の生活態度が佛教へしまつて逸げ出して行つたといふのは、これは價値の顛倒でありまして、雨の降つた時に着てこそレインコートである。併しさうかと言つて粗末にして宜いといふ意味では決してない、本當に價値を置かなければならぬ物に價値を置き、さうでない物は適當にそれらの位置にあらしめるといふことが法華開顯の思想であり、本當の立正でなければならぬ。人々が本當に尊ぶべき物を尊び、さうして秩序正しき生活をして行けば國は自ら安らかに成るといふことが、私共の解釋すべき立正安國の精神ではないかといふ風に考へるのでございます。その正しい價値觀念を人に持たせる教といふものは法華經を指して外にはない譯でありますから、法華經が立つといふことが國の安らかなるといふことであります。さうして此の國といふ概念は全世界に擴張すべきものではないかと思ふのであります。詰り立正安國は立正安全世界でなければならぬ。さういふ風に解すべく、又さういふ風に導くべきが、大東亞戰爭に對するお祖師様の門下である私共の任務ではないかといふ風に考へるのでございます。

であつたから佛教が本義であつたのであります。其の意味を取つて申しますならば、價値觀念を顛倒した者に對して正しい價値觀念を持つてといふことを仰せになつたのが立正安國論だといふ風に思ふのであります。これを具體的に申しますならば、本當に尊ぶべきものを尊ぶといふことである。よく私共御飯は大事だと申します、それでおかみさんなどはお腹一ぱい食べて、これ以上食べられないが、夏の暑い時で御飯が餘えてしまふといふので無理にモウ一ぱい食べた、其の爲に下痢をしてひどい目に遭つたり何かする。それは御飯を大事にしなくてはならない、併し御飯といふものは人の命を支へるものであります、それを命を支へる邪魔になるやうな、お腹が一ぱいであるのに更に御飯を食ふといふことは、それは價値を顛倒した者であります。よく子供がお正月に親から新しい下駄を買つて貰ふ、さうするとそれを枕許へ置いて寝たり床の間へ置いたりする、それは價値の顛倒であります、下駄は足の下にあつて踏まるべきものである。これを法華經の原理から尊ぶべきものを尊ばず、さうでないのを尊ぶといふ風に仰せになつて居るのであると思ふのであります。田舎から出て来た大學生が親からレインコートを買つて貰つた、銀座を歩いて居つたら急に雨が降つて来た、そこで早速其のレインコートを上着の下

昨晚も東京帝大の佛席に於て、佛教徒が此の新しい事態に即してどのやうに思ふべきかといふ座談會を致したのですが、或る人が、日本は大乗佛教の國である、ビル

マヤタイは小乗佛教の國である、此の大乗佛教の精神を以て小乗佛教を立派なものに育て、やらなければならぬといふことを申した時に、流石に長井先生だけあつてそれに對して斯ういふ風に仰せになつた。大乘、小乗といふことは大乘佛教の人達は言ふけれども、向ふの人達は決してさういふことは言はない、本當の梵語の意味で言へば、ヒナヤーナといふのは過ぎ去つた佛教、過去のものととなつた棄てられた佛教といふ意味である、さういふやうなことを吾々は言つてはいけないのである、過ぎ去つた棄てられた佛教といふものは今世界の何處にもないのである、のみならず日本は大乗佛教であるといふことがどうして言へるかと言はれたが、これには私共も全く其の通りだと言葉添へました。私共のやつて居ることを正直に反省して見ますと、私共は大乗佛教の國であるなどとは言へません。これは小林先生も御講話でしばしば申してをられる通り佛教の本義といふのは私共がだん／＼向上して佛の境地になることです。所が此處に居る私共の中にはさういふ者はないと思ひますが、お互ひが大乗佛教といふことを言つて居る人達が、小さな自分の欲望の爲に、病氣が癒るやうにとか、商賣が繁昌するやうにとか、此の子が丈夫になるやうにとか、さういふことで佛を拜んで居つて、どうしてそれが大乗佛教と言へ

あのお言葉を無にしないやうに、お互ひが努力するより外に途はないのではないかと思ふのでございます。私共は何時でもそれを目標として暮らに信仰を勵むべきであります。マレー沖の海戦の時の日本の少年航空兵出身の兵士達は、あの彈幕の中で演習と同じ態度で敵に向つて居つたといふことでありますが、實戦の場合に演習と同じ氣持で敵に向ふことの出来るのは、平生の演習に於て實戦と同じ氣持で訓練を積んだからであります。私共は一閣浮提第一の本尊を此の國に立てるといふやうなことを、それは後のことであつて、今の教の勢力が盛んになつて、さうして何か客觀的なものがそこに出来上つて、先程申しましたやうに、タイやビルマのサルタン達が日本へやつて来て、さうして教を求めるといふやうな風に形の上を取つてはならないと思ひます。一閣浮提第一の本尊は、私共が平生の生活に於て自分の心の中に立て、さうしてそれが一人々々多くなつて全日本に擴がつた時に、東亞共榮圏といふものは自ら出来上るし、世界の新秩序といふものも出来上るのではないか、又さういふことを目標として進むべきではないか、斯ういふ風に考へる次第であります。

終りに臨み私は皆様と御一緒に、本當にお祖師様の眞義、佛陀の眞義に徹した、日常生活に於て實踐的に、また實戰的にやつて行きたいと念願する次第であります。

ませうか、吾々お互ひがやつて居ることの中に小乘的なものは深山あるのであります、昨晚も私共は、そんなタイやビルマの人達が大乗佛教でどういふやうなことを言ふより先に、お互ひの中に於ける小乘的なものを先づ排除するのが本當の問題ではないかといふことを申したのでございます。さういふ點に於ては本多殿下などは早くから達觀せられまして、さういふ小乘的な要素を排除して居らるゝのでありますが、私共の中でもまだまださういふやうな小乘的な者は深山ある、これは私共がお互ひの精進に依つてさういふ塵や芥は拂ひ退けてしまはなければならぬと思ふのであります。さうかと言つて商賣が繁昌したり、病氣が癒つたりすることがないかといふにそれはあります。それは皆が向上して佛の心持になつて、懈けず怠らず一家和合して仕事を勵めば、其の結果として自ら商賣は繁昌して来るし、病氣は癒つて来る譯であります。又佛教の本義から言へば、其の病氣なり、貧乏なりに依つて心を苦しめられないことは實は佛教の本義なのであつて、それ／＼の境地の中で一つの悟りの境界に達するのが佛教の本義ではないかといふやうにも考へられる次第であります。

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改訂版	特價	金壹圓九拾錢
法華經要義	賜天覽	送料共	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	同	金貳圓九拾錢
法華經要品	同	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	同	金五圓
磯部藩事蹟	同	特價	金壹圓七拾錢
本多日生上人	同	送料共	金拾錢
勳行作法	同	同	金壹圓
佛教の心髓	同	同	金壹圓
河合勝明著	同	定額	金壹圓
皇道と日蓮主義	同	送料共	金壹圓

藝名中村吉之進事、原本正氏は先年來病あつても無きが如く、我々として其の道に精通せられたるも傍ら大いに妙法の宣揚に盡され居たが、惜しい哉、遂に正月六日、美事なる最後の教を示して、靈山へ往詣された。行年四十八歳。法號 深達院正信日輝居士
左記は氏の先頃、劇に登せんとされての力作である、こゝに永き記念として其の御功徳を御披露させて置く。
其の御功徳を御披露させて置く。
御法明忌、御遺族より教化運動資料として、御遺志により金封を御資前に御供へ頂いた事、重々感懐に堪へない。謹みて記録し以て御冥福をお祈り申上げらる。南無妙法蓮華經

日什大正師行狀記

榎本 正

時は後龜山天皇の天授六年の晩秋、所は會津羽黒山東光寺講堂の一隅。天台の學徒、等覺・鐵尋・善如坊の三人ヒソヒソと密議を凝らして居ります。
善如 困つた問題だ。
鐵尋 誠にノウ、等覺御坊の御意見は……？
等覺 殺してしまふのだナア。

等覺 わしに同じ事を何度も謂はせてくれるな、天台の爲、山門の名譽の爲だ。兩師、恐らく御同意であらうな……
鐵尋 山門の爲。
善如 善如坊も……？！
等覺 兎に角、一同も待ち侘びて居るであらう……此事を報告して。
等覺 そうだ、勿論先刻の雰圍氣から見ても不同意の者は一人もあるまい。
善如 では參らう……

○ ○

此處は羽黒山中、後年お釜岩と稱する所でありまして、學徒等の暗殺計畫の危難を脱して參りました玄妙老師、檀徒は日出山又次郎英秀、それに先程の善如坊の三人でございます。
善如 お疲れでございますらう、此處まで參りますればモウ危険はございません、しばし御休息遊

善如 御坊興奮してはいけないぞ。
等覺 何が興奮だ、わしは結論を云つて居るのだ。
善如 それだから云ふのだ、其の結論へ達する迄には、叡山三塔九院三千の學頭であつたといふ事、又現に吾々の師匠であるといふ事實もあるのだ。法華經には「其の過惡を出さん、若しは實にもあれ若しは不實にもあれ」と説かれてゐるではないか。
鐵尋 勿論だ、現在の師匠であり、前叡山の學頭であつたればこそだ殺してでも天台法華の名譽を保たなければならぬのだ。玄妙老師近來の論談釋義は全く日蓮法華の義分だ、天台法華を捨てて日蓮法華に改宗されて居るのだ。只それを宣言されぬだけの事なのだ。
鐵尋 老筆されたのかナ、麒麟も老ゆれば何とやら。

日出山 ばしませ。
玄妙 能化の御疲れもさる事ながら、善如坊には何から何迄の御心遣ひ、殊に一山から裏切者として扱はれる危険を冒しての師の御坊への孝養、日出山又次郎感激致して居ります。
善如 恐れ入ります。
鐵尋 自分は今纔に正法に歸依しただけに危く一命に及ぶ所であつた、日蓮大聖人弘通されるに就て、大難四ヶ度、小難其數を知らず、經に「如來現在 猶多怨嫉 況滅度後」と、釋には「三障四魔紛然として競ひ起る」の由、此處に初めて身讀し得た。今より正義宣揚に邁進する身の前途、その危難幾程ぞ、されど「諸天晝夜に常に法の爲の故に而も之を衛護したまふ」我不受身命 但惜無上道是しきの事、首途には輕しと爲す。

等覺 イヤ、いくら老いても驚馬になるやうな麒麟ではない、イヤ驚馬になつたのなら問題はないのだ。
鐵尋 日蓮法華は弘まつて僅かに百年にしかならぬが、我が法華の宗號を彼れに奪れた觀がある程、天台法華は氣色を失つた此時、此際、碩學の玄妙老師が天台から日蓮に歸伏したとしたら何となる。等覺御坊の御意見もさること乍ら、是は早々叡山に登つて事情を談じ、座主の御坊から傳奏を経て、權威を以て老師を彈壓するの法は如何。
等覺 手ぬるい、手緩るい、傳奏を経ても法論は其の邪正に依る。所詮は思ひ切つて寮所に忍び込み密かに扼殺し、表は遷化と披露したら宜からう。古稀に近い老人、誰か怪しむ者があらうぞ。ア、法體の身で、而も師の御坊

日出山 玄妙能化、御生誕は當地靈澤の郷八幡宮の社壇にてと承る。是れ已に尋常人ならず、御幼名を玉千代丸と申上げしが、御成年の阿、さしも慈しみ給ひし御兩親の相ついでにまかり給ふ。夫より叡山に慈遍僧正を師として學び、幾程も無く、山門三千の學頭とならせ給ふ。功成り名遂げさせられて、御出生地、當羽黒山に御歸郷遊ばされ給ふ。
鐵尋 然るに昨年、我れ六十六歳の阿不可思議の妙縁にて、日蓮聖人の御妙判、開目鈔上下二卷、如說修行鈔一卷、此の二部三卷の御書を得得し奉りぬ。拜するに嗚呼一句は一句より、一行は一行より我れ多年の疑網頓に解けぬ。故に天台過時の迷門を捨て高祖應時の本門に歸し、自ら御書を師匠と憑み直授相承し奉る者なり、と誓ひぬ。其の夜靈夢

に大聖人を拜し「什」の一字を賜はり「日什」と名乗る。聞くならく、下總真間なる弘法寺には、大聖人の御妙判數多藏するの由是より下りて親しく拜讀致し度き志願なり。善如坊には只今より「宰相阿闍梨日仁」と名乗り給へ。

法寺に到り、時の貫主日宗に面接。歸伏狀を認めることに依つて漸く日蓮聖人の御遺書を心ゆく迄拜讀する事を得ました。そして宗義を探れば探る程當時の日蓮門下の謬亂を知るばかりでありました。

而、立正安國論並に申狀を捧げ、天奏を遂げました。七月六日には洛中弘法の輪旨と、二位ノ僧都の位階を下賜せられました。時に上人御歳六十八歳。翌七日京都を御出發、十九日には身延に宗祖の御遺跡を拜し、夫より駿河の松野郷を御通り遊ばれまする。

日仁 ハハツ 有難き御ゆるし。

日什 今身より佛身に至るまで。

日仁 今身より佛身に至るまで。

日什 本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目を能く持ち奉るや、否。

日仁 能く持ち奉る。

二人 甫無妙法蓮華經 ママママママ

日什 さらば俱に下り給ふべし。日出

山殿、數へつくせぬ御芳志、何時の世にか忘るべき、是にて袂をお別ち申さん。

夫より玄妙日什大正師は、下總真間弘

法寺に到り、時の貫主日宗に面接。歸伏狀を認めることに依つて漸く日蓮聖人の御遺書を心ゆく迄拜讀する事を得ました。そして宗義を探れば探る程當時の日蓮門下の謬亂を知るばかりでありました。

「我が此の土は安穩にして 天人常に充滿せり……」
尊いお坊様が、有難いお経を讀んでござる。
何と良い聲ではないかノウ。
わしは是れ迄にいろ／＼な坊さんのお経を聞いたが、只聞いて居るだけで、こない／＼気持ちになる様な事はなかつた。キツト偉い坊様にちがひない、さうぢや、娘の病氣を癒して戴かう。わしは婆さんと呼んで来てやらう。

子供乙 法華骨無し、門徒もの知らず。

ヤア一イ

什師 ウム、日足の様子では早や午の刻と見える。

老人 ヘエ、お上人様、お願ひでござ

います。わしに一人の娘がございます。永の病ひでお加持や御祈禱も致しましたが、とんと験が見えまじネエ、わしのうちには代々法華でございまして、お祖師様より外の佛様へは、掌を合せた事はございませぬ、それなのに未だに験が見えまじネエ近頃うちの婆さんなどは、いつそ阿彌陀様へお願ひしたらとかお薬師様がよかつべエなどといひ居ります。ソリヤもう婆さんの氣持ちも無理ではございませぬが、わしは何處迄もお祖師様に逢していただきたく思ひます。

老人 男 お上人様は法華のお坊さまとお

見受け申しました、どうぞお祖師様の御利益で娘の病氣の癒りますやう、お加持をお願ひ申上ます。わしの家はツと此の近くでございまして、どうぞお越し下さいまして……
御仁とお見受け申しました。ヘエ、わしはモウ一生懸命でございまして、檀那寺のお和尚さんは、それ程一生懸命に、お祖師様へお願ひしても癒らネエのは、能く／＼の罪障だ、人は諦めが肝心だ、と云はつしやいます、一人娘の事で、わしにはどうも諦められまじネエだ。イヤ諦める事は無い、しかし代法華のお家柄といふに、祖師に病氣を癒して貰はうなどは聞違ひぢやノウ。

女
老人
什師
聞違ひぢやノウ。
ヘエ……違ひますかの、お題目を申して専子母神様へお願ひするの、どうしてちがひますぞうぢや／＼お題目を申してお祖師様へお願ひするのが、どうして聞違ひでございまして。あんだネ、お前がた、又始まつたダネ。お上人様へ失禮な、靜かにしねえかヨ。お上人様ご無禮致しました、此の二人は法華でありながら、いつもあんな事ばかり云つて、いさかいます。ヘエわしも法華でございまして、此人達のやうな聞違つた信心は致しません、わしはモウ初めから帝釋様より外に拜んだ事

心はすまむ 堀川の水

十月九日、會津に御着。

明れば元中九年、正月十五日に御兩親の追善供養を修し、二十一日に、一旨三通の置文をお認め遊ばされました。

○ 此處は會津妙法寺、病重らせ給ふ開祖の御病床、弟子、檀越は圍繞して居ります。

爾時世尊從三昧……

仕師 日仁

日仁 ハツ

仕師 日蓮

日蓮 ハツ

日義 日實……其の外、皆々控へ居ります。

仕師 葦名殿

葦名殿 ハツ

仕師 日出山殿

日出山 檀徒の者も一同是に控へ居ります。

仕師 日什、過ぐる年此地を辭してよ

甲 どうして法華が骨無しだ
仕師 皆の衆、本佛を忘れた時、法華は骨無しと成りますぞ！

○ 仕師の眞間に御着き遊ばされましたのは、七月二十七日でございました。翌弘和二年三月、又もや眞間を御出發今度は鎌倉に到り、管領足利氏滿を諫め、同地裡極に本興寺を創立、更に京都に赴き二度の奏聞を敢行遊ばされました。

弘和三年、上人御歳已に七十、三度目の奏聞を遊ばされました。○ 諸これ迄ズツとお宿を致して居りました京都六條坊門屋町、天王寺屋通妙は其宅を小庵となし、上人に捧げました。後の舊顯本總本山、妙塔山妙滿寺は是でございます。

越えて元中二年十一月八日、鎌倉埋橋本興寺に本門の戒壇を建立された。○ 門流有名な 諷誦章は、見付玄妙寺に於て、愛弟子 日妙上人第一回忌の詞

り、三度の奏聞、數度の謙曉、都鄙の弘通、寺塔の建立、日仁はじめ諸門弟の盡力の致す所とは云へ、是に伴ふ日出山殿、其他諸檀越の外護の功德や、實に計り知れざる所であらう。謬亂せる現御門下の中にて、實に祖師大聖人の正流を傳ふる事の出來たるは、噫、日什は何たる果報者であらうぞ。

が此の果報は、日什一人に止まらず、正義弘通の加人たる弟子檀越に及ぶ事、又大なるものであらう、皆も俱に共に此の喜悅に浴さうぞ。日什がいのち、はや數刻の後と覺えたり。

日什は、本迹に勝劣を立て、修行に傍正を存するを以て肝要と爲す。是れ全く高祖の御本意、上行付囑の大旨なり、此の旨に迷ひ、本迹に勝劣を立てず、修行に傍正を明さざる事、自立廢

りお執筆遊ばされたものでございます元中五年八月二十五日、置文を認め、眞間の歸伏狀を效無きものとなきさいました。依つて即ち元中五年八月二十五日こそ、元什門派、或は妙滿寺派と稱しました顯本法華宗の建立となりました次第でございます。

元中八年七月二十五日、京都の弘通を息め、故郷の會津へ向けて御發足。

○ 加茂の流れ、遙かに、かすむは愛宕山、あれが堀川、二條の御所、北山時雨のそぼふる夜まで十年に足らぬ年月なれど、本化弘通の地と思へば、日什が爲には、百年の知己とも覺ゆる都。アア懐しの京の地よ、ホ、行手に眠れる比叡、此の山に天台を學ぶ幾十年。日什も亦、日本第一の富める者歟。

さらばよ、都、さらば堀川。老が身は、いづくのはてに
くちるとも。

忘の師敵對なり、左門様の跡には同心申さず、只仰いで 大聖人の御内證より法水を酌み奉る是れ即ち經卷相承の名分なり。

さはいへ、何れの御門徒たりとも御書に改悔ありて弘通あらば日什の門弟は隨身して、高祖の化儀を扶け奉るべし。諸宗は墮獄の根源、法華宗ばかり成佛なすべく堅く申さんぞ、日什眞實の弟子たるべし。設へ日什が記録に載せたる事なりとも、大聖人の御書に背かば、本となすべからず。御經と、御書と、大論師等の本意の釋を違ふ可らず御經と、御書と、本意の釋を違ふ可らず。

每自作是念 以何令衆生
得入無上道 即成就佛身

大正師、玄妙、日什上人、安祥として遷化し給ふ、時に元中九年二月二十八日辰の刻。南無妙法蓮華經

定

門中可_レ得_レ心事

大聖御門第六門跡並天目等一流皆依_レ有_レ方軌佛性共背_二大聖化儀_一處_レ不_二同心_一也直日什仰歸_二日蓮大聖人_一處也門弟等深可_レ存_二知此旨_一也

但於_二三下總眞間_一有_二歸伏狀並起請文_一雖_レ然依_レ違_二法門並法軌大聖御儀_一捨申處也 是捨惡知識之質也

右日什之門弟等尋_二此旨_一於_二此旨違背輩_一者可_レ爲_二謗法墮獄罪過_一爲_二後日_一置文狀如件

嘉慶二年戊辰八月二十五日

二位僧都 日 什 在判

記事

本部 閣報

二月十一日 七百二十一年前、承久四年、貞應元年の昔、この二月の半に於て、本化日蓮聖人は房州小湊の磯のほとりに孤々の聲をあげられた、これこそ世界人文の上に大きな意義を有つものなのである。

又我が統一閣本部の浮合は、昭和八年二月十一日、時の文相鳩山一郎氏其他多數名士に祝福されて閣議の披露に及んだ次第であつた。本年は丁度第十周年に相當する。特にこの日は、大東亞戰爭星港に於て、早朝皇軍は、敵陣地左翼の支那艦隊であるブキテマ山附近に進撃し、市街を指呼の間に掃蕩し乍ら、慈悲を以て敵に降伏を勧告した極めて感涙深い佳節であつた。

顧みるに、二千六百有餘年の往昔、皇宗御建國に際してどれ程御辛勞遊ばされたか并察するに畏れ多い次第である。凡そ事の成るは成れるの日に成るに非ず、必ず遠く因つて来る所がある。赫々たる大戦果に輝く今日の事實は十年二十年だけの近因のみでなく、究に其の本源は長遠である。明治の教育に關する御詔には「國ヲ譽ルルコト宏遠ニ徳ヲ樹アルコト深厚ナリ」とお宣べ

勲である。かの老子は「夫れ慈なれば以て衆へば即ち勝ち、以て守れば則ち固し、天の將に之を救はんとするは、慈を以て之を衛ればなり」といひ、月上女は「慈悲心決定すれば禍恨なし」と喝破してゐる。此等を實際上に行ひ示してゐるものこそ世界廣しと雖も、我が大和民族以外にはない、かゝる無比の傳統精神も磨かねば曇る。されば何を以て研ぐべきか、聖者は「學問の本は儒・釋・神である、此の三法は天極の自有にして、人造の私則に非ず、皇政を導き、國家を治め、人情を正し、黎民を善くするものである。然れども其の一に通ずる者は、知らざるを以ての故に其他を非とし、互に誹謗して交々嫉妬し、學却て邪となり、法却て妄となる、これ聖を破り、政を破る大罪なり」と。此の我が國精神文化の中樞をなす神・儒・佛三教の特色と調和に就ては、本誌の一月號からの本多上人卓論を精覽されるれば自ら明となるであらう。

私共本有の法性が躍動する上に於て最も肝要な點は、哲學上の確固たる基礎の上に樹つた佛教の信仰により、その迷妄を掃拭し、自ら本心の覺醒によつて清淨となり、そこに本佛の當護を感得しつゝ捨我精進することである。さてこの日午後二時、前夜の清められた残雪の未だ消えやらぬ中を、遠く千葉や、又横濱からも、更に市内の各方面から續々と紀念の日を祝願し、通んで信念誓進御奉公の誠をいたさんものと、莊嚴された御寶前に參集された大衆と和賀上人の導師により法要を厳修し、引續いて磯部理事の開會の挨拶と共に「本尊意識確立」に關して其の要綱を述べ、小林一郎先生は「發展と反省」といふ題下に、大戦果に輝く今日、大なる歡びであると同時に將來を考へると、そこには又憂なき能はずで、それは大東亞九億三千万の人心を、どうして善導し向上せしめられるかといふことである。申す迄もなく世界無敵の皇軍の大威力は、やがて米英を徹底的に征伐せしめることが出来るであらうが、國家は滅裂に歸しても、國民性は破壊されるや否やであります、例へば猶太は今日一國家としては存在しな

くとも、猶太人の思想なり勢力はどうであらうか、此所をよく考へねばならぬ。各國民性の長所を以て、我が國に反抗して来るといふことを十分に考へておかねばなるまいと思ふ。シンガポールが日本に歸してもそこには八十萬以上の支那人の根が張つて居る、經濟上からも、勞動力からも共に生産上の強敵である、これを自在に屈服せしめるにはどうしても頭腦によるべきであるまいか、戦争には勝つても、商賣でやられるやうでは申譯あるまい、此の點を條程よく按配せねばならぬと思ふ。私は先年歐米を廻りましたが、英人でも、米人でも短所も多いが、又長所も持つて居ります、良い所は學ぶべきである。一職工にしても亦學校の教師にしても實に立派な人格者が澤山に居ります、顧みて恥かしいことが我々に數々ある。日本の教育法は未式に據るが、こゝには幾多改善されるべきものがある、其他役所の仕事でも馬鹿々々しいことがありますが、お互に信じあふことが足らぬのではないか、これは各方面にその事が見受けられてお産しいことでもあります。更に交通機關に於ても近頃はお互の間に氣が荒んで

見へる、實に喧嘩が多いのです、これは平素の鍛錬の足らぬ爲であります、水い間違えられた生活に馴れて来たから、苦勞が足りません、近頃になつてすべてが統制され思ふやうにならぬからと八つ當りするのです、こんなことでは長期戦に於て心配でありませす。これは先づ手近い一家の中で、家族同士でお互に温性を高めるやうに努めることが大事であります。それには何といつても宗教の信仰を必要と致します。早い話が自分の子供を教養して行くにも、私も凡夫だから、お前達と一緒に佛様の教を奉じてお互に正しく行かう、共に信心してゆかうといふて自身が實行してお手本を示しつつ勵まし合ひつゝ反省し、懺悔し、敬愛して親子兄弟は親しみあふふことで暮らしたいものであります。世間では信心といへば、何か福を授けて下さるのか、御利益は？といひますが、それは却て煩惱を智すことになるので、正しい信心とは、佛様の教に隨つて先づ自分の心の建て直しをすることでありませす。ですから常にお經を讀み御書を讀んで自ら反省し誠め合ひ、誠實の人と

なることが肝要を存じます。等々。幾多の實例を挙げ、又傳教、日蓮等先師の事蹟に照らして興味深い中に尊い教の意を繰込まれたお話を數十分興へられた。岩野閣下は、この祝賀すべき紀元の佳節と又本國の將來性を昂揚されてから、徐ろに大東亞戦争と神武天皇様御東征の事柄とを結びつけて我がマレー作戦が、神武天皇様の紀州よりお進みになつたこと、ジャンダルは荒氣津にもあつたこと、靈夢のこと、飛行機と道臣命のこと等、將軍は將軍だけに巧妙に接説され、結局は銃後の國民は開國當時を偲んでモット／＼生活を切り詰めて一方献金や公債を買ふなり、貯金をして總てを捧げた一億一心の實を示すことである。そこに皇軍の威力は彌々發揮されるから、各は非常な決意を以て生活様式改善に着手し、誠私奉公、節約實業であとは全部皇運扶翼の爲に政府へ提供されたい。神武天皇様建都の詔勅を拜すると、その御實業の御様子がよく拜される。明治天皇様の御日常も亦その通りお示し遊ばされて長き筈みである。今や此の大東亞の創業に際

しても、神武天皇様の御奉國と等しく先づ國民は勤儉から始むべきである。そこで人は理想は知つて居る、けれ共思ふ半分も實行出来ないと言ひますが、それはお互の魂に具へてある忠の心がズーツと奥深く潜んで居るからであるから、此の忠の心をモット外へ引出して来ねばならぬ。それには修練が大切である、日常國民儀禮を實行し朝夕宮城参拜を勵行してゆけば自然と天皇様に対する湧仰の情操が深くなつて、やがては目頭が熱くなり、涙が自ら流れるやうになる、そこに忠の心が湧き出でゐるのです。忠の心が顯はれて来れば頭惱が善くなつて立派な智者となります。どうか子供等にもこの魂を磨き出す様、先づ親が家庭に於て祖先を能くお祀りするやうに致したいものであります。

以て示し與へたいものであります。云々 最後に田中理事は時間のない爲に、簡略明瞭に自分の經濟人としての觀察から、從來は金中心であつたのが、漸次物中心へと移動し、これも將に行き詰らんとして、最後は心の問題へと向けられて来た。人物本位といふことは信といふことに係る譯で、信じ合へる人、信じ得る人を要求する國の上に於ても等しく安心して委ね得る國信用出来る國とならねばならぬ。信に因る經濟機構でなければ、今後思ひ切つた働きは出来ないでせう。それにはどうしても國民の人格に基くことになり、茲に正しい宗教の信仰が、絶対的必要となるのであります。かの米英の地取政策に替るに、我が道義的共榮團といふ所謂世界維新は、こゝから發揮されるべきでありませせんか。任重くして道遠しの感もありませんが、幸に私共は無上の明教を戴き、自慶安住以て毎日感謝法悦の境地にあつて御奉公出来ることを祝願しつゝ、一層皆様の御濟授をお願ひ致してこの記念の結びの御挨拶と致します。

つ六時頃惜しき散會となつた。 左記本郷氏のお寄せ下さつたもの、 大東亞戦時下紀元節 開館第十周年を迎へて 日當詠 霜に堪へ雪に凌ぎて更月の 梅咲く春に遇ふぞ嬉しき 大東亞戰果輝く紀元節 開館こゝに十年迎ふる

ニテ及び星島等、彼等多年に亘る東亞侵略の三大據點は、僅か七旬を出でずして皇威の御前に拜跪し、世界を擧げて驚嘆せしめた。更に一方にはボルネオ、セレベス、ニューブリテン等の要衝も亦悉く皇軍の掌中に落ち、かの蘭印艦隊の主力も撃滅されてしまつた。有史以來未曾有の大作戦であり、大戦捷である。大聖釋尊の慈誨に、轉輪聖王の態度は、

刀兵の劫には大力勢を有し、其の殘害を斷じて遺餘なからしめ、能く衆生の種々の怖畏を斷せよ。 とある。刀兵の劫とは現代の如き世界戰亂の類なる時をいふので、さういふ時には平素練成された大武力を以て、邪惡非道の敵性を徹底的に降伏するやう粉碎せしめよと述べられ、又その遊行統治に就ては、

大詔奉戴日 從來毎月一日早朝、東亞奉公日行事を勵行してゐたが、本年正月からは周知の如く、これが八日の大詔奉戴日に變更され、此日に於て全國民は當時の感激を新にし、大東亞戰完勝を見る迄舉國精神に凝り、一億一心の實を擧げるやうとの趣旨を體し、本部では同日晨朝を期して清庭を張り、皇威宣揚武運長久の祈願と陣病疫災靈供養の嚴修後、導師講師の大詔誦讀且つその一端を謹述閉式とした。時正に七時三十分。

初め東海の表に至り、次に南方、西方北方を行ぐり、輪の至る所に隨つて、其の諸の國王、國土を獻すること本東方の諸の諸國の比の如し。時に轉輪王既に金輪に隨つて四海を周行し、道を以て開化して人民を安慰し、已に本國

閉式後、同好の士女、三三五五語り合ひ

二月十八日 大東亞戦争勃發の劈頭、忽ち米英艦隊の主力を全滅せし以來、香港、マ

に還る、時に金輪實は宮門の上に在りて虚空の中に住す。

三千年の昔に、今日只今の事柄が説き切つてある。機を正し、手を膝にして謹聴すべきである。

英の東亞侵略策點として永久不落の要塞を以て誇つた獅子の堅壁も、盡忠精銳の皇師の軍門には脆くも屈服せざるを得なかつた。陥落の翌日十六日東條首相は、貴衆兩院で、大東亞戦争の目標とする所は、我が鞏固の大理想に淵源し、大東亞の各國家、各民族をして各その所を得せしめ、皇國を核心として道義に基く、共存共榮の新秩序を確立せんとするにあると宣揚されてゐる。洵に尊い有難い親心である。かゝる親心を東亞九億三千万の人々は何と受取るであらうか、親は子を離れないが、子は親を離れたいのが世間の慣しである、そこに心と心の感應は、人々の正意誠心が根本であることを思ふ。此の正意誠心を欲するならば常に天地宇宙に對して敬虔の情操を養ひ、更にそこより一步前進して宗教信仰に安住することである。最近には漸く「敬天」の思

の増進に努め、更に會員の吉凶を俟にし、益々異體同心の歡を堅くしつとある。

福島支部報

一月二十八日夕 大町中村様方にて本年第一回の清集懇親を行ふ。

二月五日 高商如春社に磯部先生をお迎へして例會を開く。「華國の理想と法華經」の題下で一時間餘の御法話を賜つた。座談會は大東亞戦争下の學徒の意氣にふさはしき活潑なものであつた。

同日夕 大町中村様方に於て支部例會磯部先生毒量品讀講。次いで香港攻略に参加されし岩淵中佐の御手紙が披露された。

酒悅立正産業報國會記

ラチオが故障してゐるので、シンガポール陥落のニュースを聴くことが出来なかつた。その時分、僕は小さい娘二人とお勤の最中だつた。遅くなつて、弟が外から歸つて来て、シンガポールが落ちたと聞いて飛

想が濃厚に現はれて来たが、未だ宗教に於ては極めて低劣である、各人皆本尊に迷へりて、世間的には常談ある人も、出世間には極めて貧弱低劣である、隨つて其の一舉一動は凡下の域を脱せない、十年百年千年の將來を光被せしめんには、何としても出世間の偉力であらねばなるまい。故に人、一度正しい信仰を起せば、心に法悦歡喜の情、油然として涌き起り、眞正な幸福を享受し、自ら正義の力が躍然として發動し、そして道義的感情に促されて善根功徳を植へ、元氣充實して能率増進し、いかな大業も達成するものなのである。この信仰道義の念は、國民としては盡忠報國生死超越し、家庭の人としては孝慈親和、社會には相互扶助等々一切の美德を實踐する、人則神、地則天である。此所に始めて永遠の平和は示現される。これは前途遼遠のやうであるが、人々の自肅精選の如何によつて、成否は決せられるであらう。故に今日を以て戦捷氣分に酔ふことは戒心すべきであり未だ序幕である。凡そ破壊工作は難いやうでも本易い、建設に到つては難中の難で

上つて喜んだ。寝てゐる妻を起したる自然と騒ぎが大きくなつて親父も子供達も起き高し果てはお茶を沸かし、午前二時迄も話し込んだ。翌日月曜日の統一團の朝のお勤めがなかつたならもつと起きてゐたかも知れない。それ程喜びに興奮した。

何處の家でも新少した風登だつたらうと思ふ。日本人は、誰もが子供のやうに喜んで。喜びも頂上に達すると、其處には最早や老ひも若さも、男も女も無くなる。皆が一つになつて泣きながら喜び合ふ、たいそれだけしかない。

その晩は、僅か二時間半しか眠れなかつたが、四時半には跳ね起き、五時に家を出て、白雪を蹴つて統一團に向つた。何だか知らないが大變愉快だつた。團でも誰も彼もがシンガポール陥落で喜び合つて居る。

この邊の農村や田舎の人達は、今でも舊曆の正月をやつてゐる處が多い。二月十五日、シンガポール陥落の日は、恰も舊正月元日に當つてゐる。農家の人々や田舎に一人である僕の母なども喜んで違ひない。

この日は、また釋尊涅槃の日である。衆

ある、形の上だけの仕事は出来易いが、無形の心の建て直しは至難である、而もこの最難業を完遂せねば、目的貫徹といふことにならない、そこに基本の寶珠をウツカサ忘れないやうに、此際門下の同志は爲國爲神、爲道いよ／＼精選すべきであらう。

さて二月十八日朝六時二十分、莊嚴された本部御寶前に於て酒悅立正産業報國會員及び團員有志と共に至誠を傾け時餘に亘つて第一次戦捷報告並に大東亞戦争完勝祈願會を勤修し、又戦捷諸精靈の回向供養を捧げた。

憶念するにこの大東亞戦争は、極めて佛縁の深いこと寧ろ不可思議である、即ち二月八日は、釋尊は御成道の聖日であり、又二月十五日は申す迄もない御涅槃會である佛吉祥すべく、努むべきである。南無妙法蓮華經

土曜日 毎週土曜日午後一時半より二時迄修法、二時より三時迄小林先生の摩訶經開講、而して一と三の土曜日は其後に引續いて婦人會の普集を慶し、お互の信念と道念

生を度せんが爲めの故に、方便して涅槃を現す、而も實には滅度せず、常に此に住して法を説く」と大宣言をされ、涅槃せられた聖日である。吾々は、毒量品あるが爲めに、佛の常住も分るのである。佛の眞の涅槃の意味も汲み取れる。佛の涅槃、即ち、而も實には滅度せず、常に此に住して法を説くと云はれる、所謂久遠實成の思想が、佛教として傳はらなかつたなら、人類はもつと惨めなものであつたに違ひない。シンガポールが陥落し、東亞民族が白人種の桎梏から逃れ、永遠に生きる日が、奇しくも釋尊涅槃の意義ある日に遇つた事も珍らしいとせねばならぬ。而もこの日は大雪の日で、國中が淨化せられた。

翌十六日、月曜日の御勤めの後、磯部先生から、この日は、聖祖日蓮聖人御降誕の尊い日であるといふお話があつた。日蓮上人は波木井殿御書の中に「日蓮は日本國人王八十五代後堀河院の御宇、眞應元年壬午安房國長狭郡東郷の生れなり、佛の滅後二千百七十一年に當るなり」といはれた尊い日である。この聖日に、シンガポール陥落

の喜びを分かち合ふのも不思議なる符合であり喜びである。日蓮無ければ日本國もないといはれた位の日本の日蓮聖人であられるから聖人も、この日を御照覽なされ喜びられたことであらう。

この日は、街を行く人々の顔も晴々してゐた。軒頭に懸る日章旗を見ても涙が落ちた。この日國旗が有難く思はれたことはなかつた。何十年振りに子供のやうな心になり、無心に國旗を振り仰いだ喜びよ。

この興奮は、當分我々の胸から去らないであらう。越へて十八日は、シンガポール陥落の記念日である。我々はこの世紀的な喜びを記念すべく、早速に新願祭 プランを樹てた。そして直ちに實行した。頌筆を防ぐために、便宜上此處では單に日程を書き留めるだけにしやう。

- 七時五〇分 靖國神社着會長御導師の下に嚴修す
- 八時一〇分 宮城へ向ふ
- 七時二〇分 統一團出發靖國神社へ向ふ

八時五〇分 宮城前廣場着、會長御發聲の下に御題目三唱、聖壽萬歳奉唱

九時——分 宮城前より櫻田門を通り陸軍省、海軍省大本營前にて萬歳を唱へ、虎ノ門より新橋に出で、銀座を通り京橋、日本橋、神田驛前、萬世橋、上野廣小路を経て仲町御實前に到り、新願祭終了報告をなし後夜食す

以上の日程に従つて行動したのであるが當日の統一團の嚴修では、特に磯部先生の嚴肅なる新願文を拜聴し、式後本多上人が自ら御書きになり、街頭教化説教に用ひられた、御題目を大書したる大旗の授與があり、一同その大旗を先頭に翻げ、太鼓を打ち鳴らしながら行進した。

- 七、綱領朗讀
- 八、顧問御法話
- 九、會長訓示
- 十、聖職完途職分奉公ニ關スル決議
- 十一、聖壽萬歳
- 十二、閉式

式終了後午前十一時一同上野警察署前迄太鼓を叩きながら行進參集し、零時四十五分上野動物園前廣場に整列し閉式、式後一萬四千人の者が宮城前に向つて大行進を開始した。

その大行進の中で、酒悅立正産業報國會のみは、堂々太鼓を打ち鳴らしながら進んだ。この太鼓行進が異彩を放つてゐたことについては後で色々な人から聞いて愉快だった。

一應宮城前で解散したのであるが、當會は大鼓を叩きながら靖國神社に參拜し、社前で壽製品と御題目をお唱へ申し上げた。統一團でも奉祝式があるので、靖國神社境内から自動電話で磯部先生にお問ひ合せをした處、未だ御法話があるといふので急

布であつた。かくて一同は感激に満ちたこの日を記念すべく記念撮影をして、各々職場へ歸つたことであつた。

シンガポール陥落の喜びが餘りに大きかつたので、シンガポール陥落の記事から書き初めたが、二月は洵に意義多い月であつた。

先づ二月三日は、昭和十七年度寒修行會修了の日であるが、當日はいつものやうに磯部先生が御導師で六時二十分からお勤めをなし、磯部先生御話の後、引續いて證書の授與式があり、池田會長の所感があつて目出度一月の寒修行會を終了した。

今年の寒修行が、如何に猛烈で、御眞面であつたかは先月の統一に書いておいたから此處では省略することにすが、流石は意義深い寒行の終了日である。式半ばにして感激に咽ぶ聲が此處彼處に聞えた。なほ今年の寒修行が、如何に好成绩であつたかといふことは、左の表に依つて明かであらう。參考の爲めに記しておきたい。

廿勤者 四十三名

- 精勤者(二十五日以上出席) 十六名
- 參加者(二十日以上出席) 十二名
- 右以下ノ者 七名
- 計 七十八名

八日、日曜日は第二回大詔奉戴式であるいつものやうに、朝六時二十分より統一團御實前に於て、磯部先生御導師の下にお勤めをなし、先生の朗々たる大詔の御奉讀があり、御法話があつた。

十一日、紀元節當日は、東京産業報國會上野支部で産業報國會建國祭の儀しがあり街頭行進があるので、それに參加するやうにした。

- 街頭行進に先ち午前八時より仲町御實前に於て磯部先生御導師の下に、左の通り奉祝式を行ふ。
- 一、閉式
- 二、宮城參拜
- 三、國歌齊唱
- 四、紀元二千六百年ノ紀元節ニ關リタル證書奉讀
- 五、宣戰ノ大詔奉讀
- 六、戦役將士及皇軍將士ニ對スル感謝歌

いで歸せつけ、奉祝會に參加させて貰いた統一團も大勢の人が詰めかけて殆ど御實前に入り切れない程盛大な集りだつた。

十三日の仲町御實前で金の聯合の事、月曜日の統一團での集りに就いて書く積りであるが、長くなつたので割愛せねばならぬ。(金城記)

統一團 一冊 金貳拾錢 送料交錢
 半ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共
 昭和十七年二月二十五日 印刷納本
 昭和十七年三月一日 發行
 (製複許不)

東京市小石川區香羽町六ノ十七
 編輯 磯部 謙 事
 發行人 磯部 謙
 東京市四谷區内藤町一
 印刷人 山田 英
 東京市小石川區香羽町八ノ十一
 印刷所 野島好文堂印刷
 電話牛込六九六六番
 東京市小石川區香羽町六ノ十七
 發行所 財團 統一團
 電話牛込五三三三六番
 振替東京九四二〇番
 東京市神田區淡路町二丁目九番地
 配給元 日本出版配給株式會社

團費誌料維持費及寄附金額收 (自二月廿一日)

一	金貳圓貳拾錢也	兵庫縣	佐倉鹿太郎殿	一	金四圓也	千葉縣	花鳥喜三郎殿
一	金貳圓也	東京	武中とく子殿	一	金貳圓貳拾錢也	旭川	田中藤代次殿
一	金貳圓五拾錢也	同	藤田傳三郎殿	一	金壹百圓也	市川	丹生俵太郎殿
一	金貳圓五拾錢也	同	村上芳明殿	一	金貳圓貳拾錢也	東京	東京府教化團體聯合會殿
一	金貳圓五拾錢也	名古屋	伊藤乙女殿	一	金五圓也	同	石井新一郎殿
一	金壹圓參拾錢也	東京	本郷常次郎殿	一	金五圓也	同	藤原清光殿
一	金貳圓五拾錢也	高岡	林長吉殿	一	金參圓也	同	黒須源太郎殿
一	金貳圓貳拾錢也	千葉縣	野口佐一殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	村松菊野殿
一	金貳圓貳拾錢也	同	大木勝司殿	一	金貳圓也	同	石山堅殿
一	金五圓也	同	村井つや殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓五拾錢也	東京	會田秀吉殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓五拾錢也	福島	熊井リキ殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓貳拾錢也	東京	伊藤夏子殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓貳拾錢也	同	久野禰子殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金五拾圓也	同	榎本正殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓五拾錢也	愛知縣	市川通源殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓五拾錢也	三重縣	伊東寛殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓貳拾錢也	高岡	高松覺太郎殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓貳拾錢也	東京	水也田春洲殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同
一	金貳圓五拾錢也	同	吉田かつぶら殿	一	金貳圓貳拾錢也	同	同

一	金四圓也	千葉縣	花鳥喜三郎殿
一	金貳圓貳拾錢也	旭川	田中藤代次殿
一	金貳圓貳拾錢也	市川	丹生俵太郎殿
一	金壹百圓也	東京	東京府教化團體聯合會殿
一	金貳圓貳拾錢也	同	石井新一郎殿
一	金五圓也	同	藤原清光殿
一	金五圓也	同	黒須源太郎殿
一	金參圓也	同	村松菊野殿
一	金貳圓貳拾錢也	同	石山堅殿

右雜有入帳仕候也 (以是領收證代用)
財團法人 統一團會計

謹告

今回財團法人東京府教化團體聯合會より、昭和十六年度に於ける本團の鑛成運動実績に徴して助成金壹封を交付された。
申す迄もなく此の世界維新に對する思想長期戦に臨み、團員各位、悉くは一層自重し大に身を以て範を垂れられんことを。

財團 統一團

目次

三教の特色と其調和(完結).....	本多日生
世法と佛法.....	小林一郎
本佛實在の宗教哲學(十).....	河合陟明
天台大師の實踐哲學.....	磯川鶏山
優婆塞戒經要解(其六).....	本多日生
記事	
○本部圖報	
○福島教信	
○産報會記	
○入帳報告	

號月四 年七十四第

統

財團 統一團 發行